

# 縄文時代の栃木県域における竪穴住居数の動向とその背景

## —諸文化要素からみる北関東における縄文時代中期／後期移行期の一様相—

太田 圭

### 要旨

縄文時代中期／後期移行期の研究は従来、気候寒冷化等の自然環境要因から「崩壊・停滞」といった劇的な変化があったかのように評価されてきた。しかし、これらの評価は、特定地域における資料の分析結果に基づいた解釈であり、考古資料が充実した現在、この評価に該当しない地域は多くあると考えられる。これまで、縄文時代中期／後期移行期における社会の変容プロセスは、中部高地・西南関東と東北北部の比較を中心に議論が行われてきた。従来の移行期に関する議論の中で積極的な評価がなされてこなかった地域として、北関東—東北南部地域が挙げられる。本稿では、北関東の栃木県域における竪穴住居数の動向を分析し、居住形態に関する基礎データを整理した。その結果と、他の文化要素との関係性を検討し、栃木県域の移行期における社会の変容プロセスの一様相を提示することで、今後の移行期研究における課題を見据えた。本稿では、栃木県那須地域から福島県中通り地域において、中期後葉から後期前葉に諸文化要素の強い共通性があることを把握し、北関東東北東部—東北南部地域に中期後葉から後期前葉を通して強い結びつきと地域性があることを明らかにした。この様相から、関東・東北における移行期の社会の変容プロセスには、単に「崩壊・停滞」があるのではなく、広域的な社会・自然環境の変化に応じた諸文化要素の変化があることが浮き彫りとなり、東日本において広域的で一様な移行期における社会変化がある一方で、地域ごとに異なる様々な変化も同時に生じており、それらの変化が双方向的に影響を与え合った結果、後期前葉以降の社会が形成されていくという見通しをもった。

### 1. はじめに

縄文時代中期／後期移行期（以下「移行期」と呼ぶ）は、社会に大きな変化が生じた画期とされている。居住形態では後期初頭に竪穴住居数が激減し、大規模集落が解体、集落は分散・小規模化する。また、大規模な配石遺構が顕著となり、墓制では配石墓や土器陪葬が盛行するといった諸文化要素の変化がみられる。自然環境の変動が変化の主要因とされ「気候寒冷化による集落の崩壊と分散化」という解釈が広く普及し、4.3ka イベントに起因する中期社会と後期社会の「断絶期」として議論されてきた（安田 1982、鈴木 1986、勅使河原 1992）。しかし近年、従来の変化を認めつつ「崩壊」「断絶」という評価に懐疑を示し、異なる評価を与える論考がある（阿部 2008a）。「崩壊」「断絶」を導く災害や環境変動の証拠が確認されていないことが指摘され、「気候の冷涼化」という現象と考古資料の動態とを都合よく解釈した結果としての「断絶期」という評価が見直されている。

従来、中部高地・西南関東と東北北部を中心として検討が行われ、移行期に「寒冷化により集落が拡散・小規模化し、社会不安の解消のために配石を含めた墓制が変化・発達する」という概ね同一の社会変化が東日本全域に生じ、中期社会の伝統とは異なる後期以降の社会が新たに形成されたと考えられてきた。それに

対し、近年の解釈では、北関東と東北南部・北陸など、これまで移行期の議論の中で検討対象外であった地域も対象としながら、関東・東北全域における遺物・遺構の型式学的分析から諸文化要素の系統関係を把握したうえで地域間の関係性を明らかにし、社会の変容プロセスに迫っている。小規模な社会の矛盾や変化に対応した結果、小さな社会システムの変化が蓄積され、諸文化要素の生成・複雑化・広域化に繋がり、「断絶期」ではなく「移行期」であったことが示されている。この諸文化要素の細かな時期的変化とその有機的関係から社会の変容プロセスを説明する方法は、分布論的解釈に依って諸要素が変化した結果のみを提示する従来の解釈とは説明方法が異なっている。従来の検討が示した考古学的事象は確かな事実であるが、具体的な変化の実態を説明する必要がある、その背景にある社会の変容プロセスは、各地域の考古資料に基づいて議論する必要がある。

近年、日本列島の各地域で考古資料が蓄積され、従来の議論の中で検討対象外であった地域において、考古資料に基づいて移行期の社会の変容プロセスを検討することが可能な状況にある。また、移行期における東日本の社会変化が影響を及ぼした空間的範囲や影響に伴う地域間の関係などは、これまでの移行期に関する議論では不問とされてきたが、今後は、社会変化の背景にある諸文化要素の関連性から変化の波及範囲や

表1 竪穴住居集成対象遺跡リスト

No.	遺跡名	地域	46	三軒屋	⑦	92	免の内台	⑥
1	城山南	⑩	47	下台原南	⑦	93	上り戸	⑥
2	城山	⑩	48	鹿沼流通業務団地内	⑦	94	堀込	⑥
3	清六皿	⑩	49	大野原	⑦	95	北ノ内	⑥
4	藤岡神社	⑩	50	稲荷塚	⑦	96	八幡山裏	⑥
5	甲塚西	⑩	51	西山	⑦	97	松の木	⑤
6	黒袴台	⑩	52	宝性寺西	⑦	98	登谷	⑤
7	屋敷東Ⅱ	⑩	53	小倉水神社裏	⑦	99	河原台	⑤
8	四ツ道北	⑩	54	柳窪石神	⑦	100	塙平	⑤
9	下林	⑩	55	坂田	⑦	101	並松	⑤
10	へび塚	⑩	56	津村	⑦	102	九石古宿	⑤
11	ムジナ塚	⑩	57	柿山	⑦	103	鳴井上	④
12	エグロ	⑩	58	鹿島神社裏	⑦	104	滝田本郷	④
13	ゴロノミヤ	⑩	59	水神山	⑦	105	三輪仲町	④
14	松山	⑩	60	岩石北	⑦	106	羽場	④
15	北の内	⑨	61	辻の内	⑦	107	大野	③
16	上林	⑨	62	鶴田中原	⑦	108	小鍋内Ⅱ	③
17	春日	⑨	63	高尾神	⑦	109	欠ノ上	③
18	奥戸	⑨	64	上欠南	⑦	110	後久保	③
19	神畑	⑨	65	根古谷台	⑦	111	石関	③
20	町屋	⑨	66	上欠	⑦	112	山苗代A	③
21	乙女不動原北浦	⑧	67	宇都宮青陵高校地内	⑦	113	室ノ木A	③
22	鷹ノ巣前	⑧	68	台耕上	⑦	114	萩ノ平	③
23	横倉宮ノ内	⑧	69	金沢	⑦	115	小鍋前	③
24	横倉	⑧	70	山崎北	⑦	116	上長井	③
25	金山	⑧	71	御城田	⑦	117	雲入	③
26	東谷	⑧	72	御城跡	⑦	118	後中崎	③
27	萩山	⑧	73	中島笹塚5区	⑦	119	弥五郎	②
28	篠山	⑧	74	野沢石塚	⑦	120	浄法寺	②
29	宮内北	⑧	75	野沢	⑦	121	湯坂	②
30	亀田	⑧	76	古宿	⑦	122	岩舟台	②
31	西黒田	⑧	77	大志白	⑦	123	片府田富士山	②
32	上小川	⑧	78	明神前	⑦	124	長者ヶ平	②
33	溜ノ台	⑧	79	竹下	⑥	125	品川台	②
34	田間東道北	⑧	80	刈沼	⑥	126	ハケットンヤ	②
35	塚崎	⑧	81	石神	⑥	127	向山神社	②
36	間々田六本木	⑧	82	上の原	⑥	128	門場	②
37	五料	⑧	83	赤坂道上北	⑥	129	脇沢	②
38	雨ヶ谷宮	⑧	84	西赤堀	⑥	130	木下	②
39	寺野東	⑧	85	磯岡1区	⑥	131	赤羽	②
40	八剣	⑧	86	弁天池	⑥	132	西ッ原	②
41	下坪	⑧	87	下陰	⑥	133	古の上	②
42	御新田	⑧	88	伊勢崎Ⅱ	⑥	134	機沢	②
43	谷向	⑧	89	市ノ塚1区	⑥	135	川戸釜八幡	①
44	島田	⑧	90	山居台	⑥	136	仲内	①
45	関口	⑦	91	御霊前	⑥	137	小佐越	①

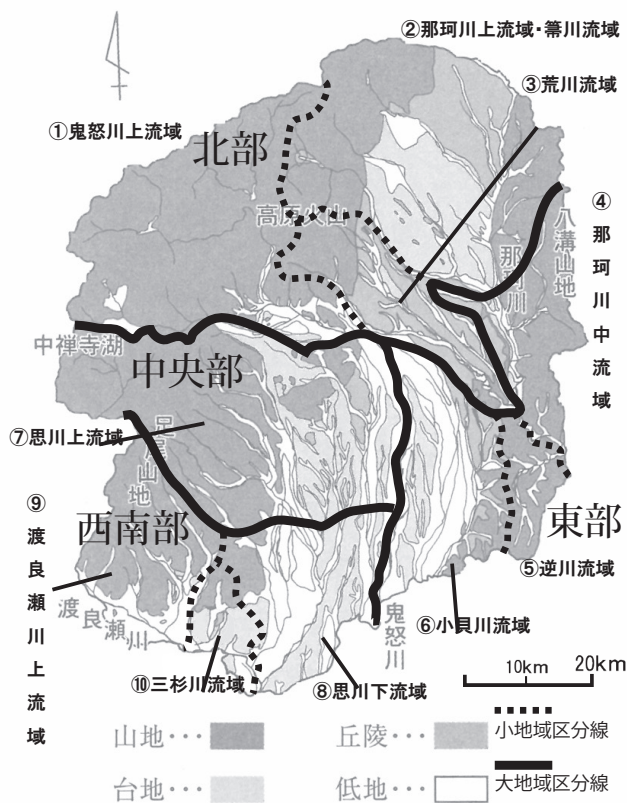


図1 対象地域の地域区分

式土器文化圏と大木式土器文化圏の諸文化要素が交錯しながら社会が変容し、その状況下において地域性を発露する地域として評価されており（海老原 1997、後藤 2009）<sup>1)</sup>、移行期における集落動態に関しても西南関東とは異なる状況であることが指摘されている（塚本 2017）。このように先行研究からみても2つの大きな土器型式文化圏の接触域であるため、移行期における諸文化要素の動向を把握することで、当該期の社会変容の一端を把握しやすい地域であると考えられる。上記をふまえて、本稿では栃木県域を研究の対象地域として設定した。

## 2-2. 対象資料と地域

対象地域における竪穴住居が検出された137遺跡を対象とし、縄文時代を通しての状況を把握するため、対象時期は縄文草創期から晩期までとした。

分析にあたり栃木県域を地形と河川流域単位にもとづき、地域①～地域⑩の10地域に区分し、大地域として北部（地域①②③）・東部（地域④⑤⑥）・中央部（地域⑦）・西南部（地域⑧⑨⑩）の4地域を設定した（図1）。

遺跡とその分布は、表1と図2に示した。竪穴住居は、時期ごとに、場の利用の頻度や定着性の程度、場の選択の様相を把握するために対象としているが、集成対象とした竪穴住居は、遺構として認定が可能で

波及に伴う地域間関係を議論していく必要がある。

上記の移行期研究における課題に基づき筆者は、諸文化要素をもとに移行期の再評価を試みている（太田 2017・印刷中）。本稿では、北関東・栃木県域における移行期の居住形態の検討に関する基礎データを整理する。

## 2. 研究対象の設定、分析の目的と方法

### 2-1. 対象地域の設定とその目的

従来の移行期研究では、特定地域を中心に議論が行われてきた。その特定地域とは、中部高地・西関東・南関東・東北北部である。北関東の北東部（栃木県北東部・茨城県北部）や東北南部（福島県域）の様相は、移行期における位置づけに不明瞭な点が多く、従来の説明の中に含めて考えてよいのか疑問が残る。そこで、北関東一東北南部を分析対象とすることで、これまで中心的に語られてきた地域以外における諸文化要素の分析から移行期の社会変容プロセスの評価を試みることにした。

北関東一東北南部は、移行期において、加曽利E



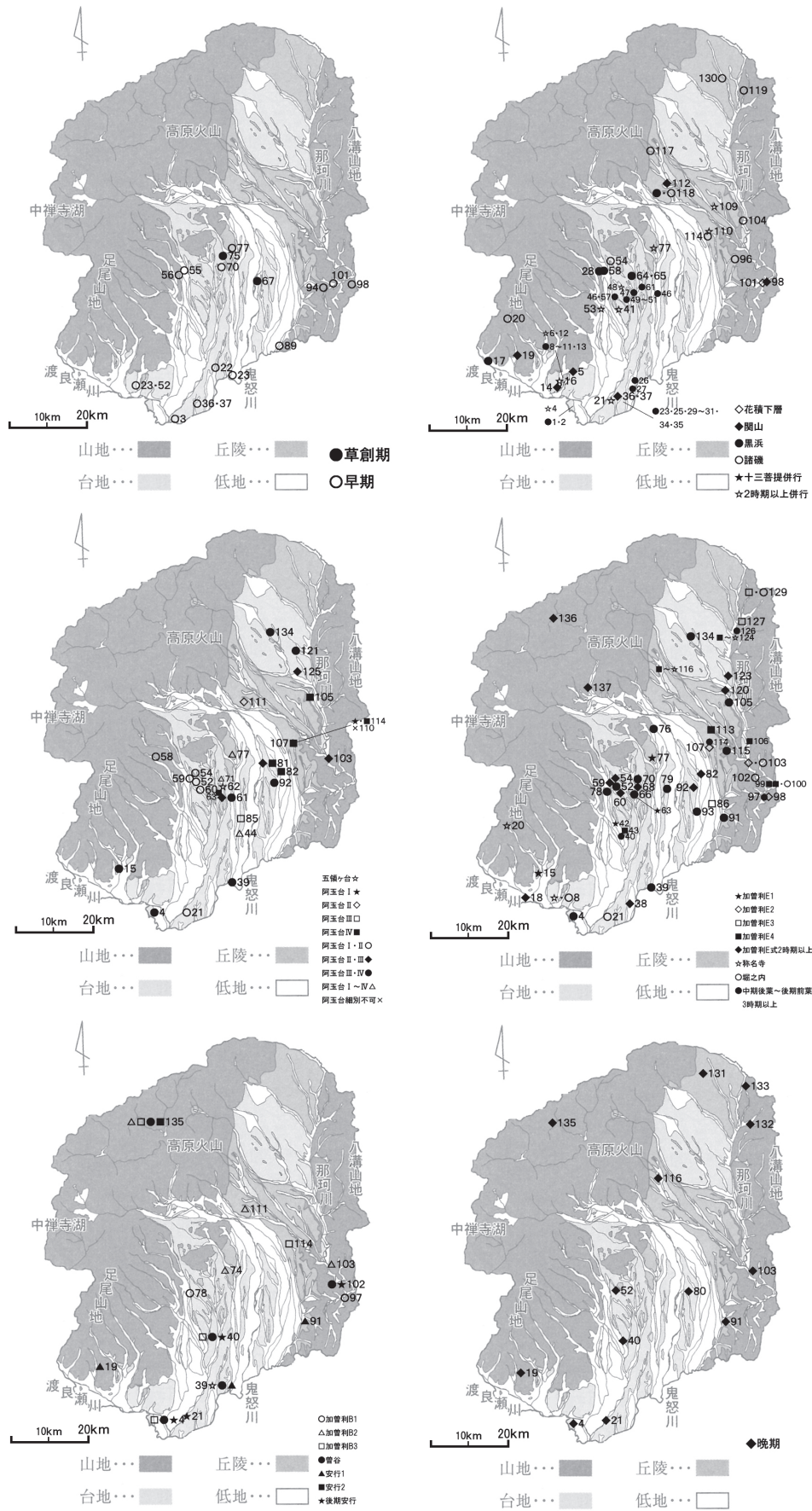


図2 竪穴住居出土遺跡の分布図

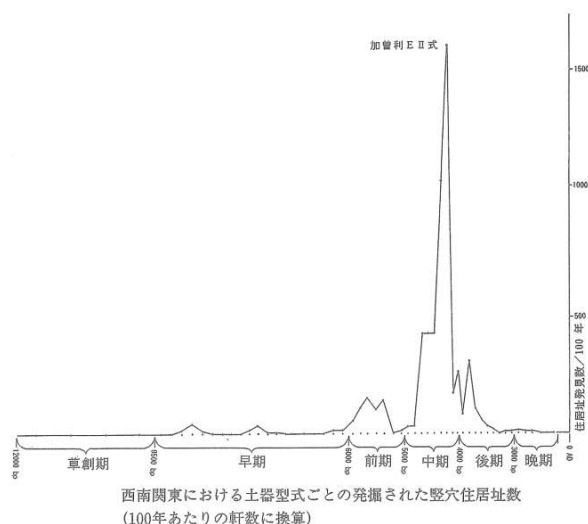


図3 今村啓爾の分析結果

あり、かつ遺物の出土状況や出土した土器により時期比定が可能な資料を抽出した。その結果、計 1325 軒を集成した<sup>2)</sup>。

## 2-3. 分析の目的と分析方法

本稿では竪穴住居の出土数の動向と継続性から移行期とその前後における居住形態の変化の一端を把握する。竪穴住居数の分析の際、以下の先行研究を参考とした。

### 2-3-1. 竪穴住居数分析の先行研究

#### ①今村啓爾の分析（今村 1997）（図3）

今村は、従来の文化に対する「繁栄・衰退」「安定・不安定」という評価の根拠は十分吟味されていないとし、住居跡数などの考古学的証拠をもとに人口変化を考える目安・方法的限界を認識したうえで、数量変化を相対的に捉える必要性を述べている。

竪穴住居数の集成データを活用する方法と、時間的変化を把握するために土器型式への「時間」の割り当て（時間幅の設定）を行う方法等、竪穴住居数から人口変化を考えるうえでの問題点を挙げ、検討方法の吟味とこれまでの人口に関する議論における問題点の抽出と代案の提示を行っている。

今村は、西南関東と中部高地の竪穴住居跡集成・分析結果をグラフ化し、グラフと実際の人口変動の間にあるさまざまな誤差とその要因について述べている。実際の住居数と発見された住居数の違い、実際の住居数と人口の関係など数値の解釈において課題があることを指摘している。これらの数値解釈におけるバイアスを克服するためには、竪穴住居跡以外の資料を用いることを提案し、土器の総重量などの指標を挙げている。自身の分析結果について、竪穴住居集成の問題点

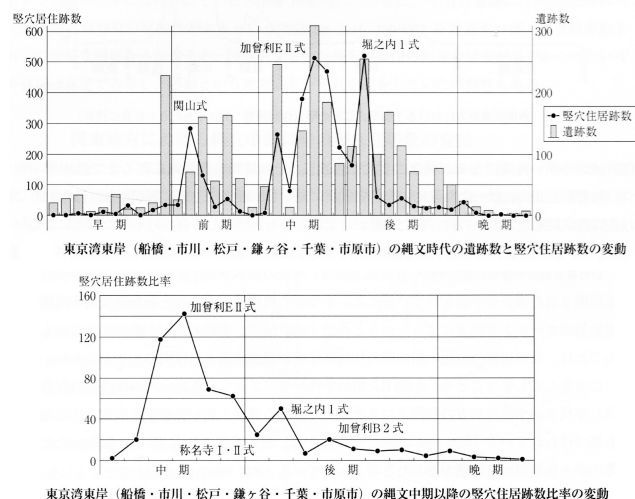


図4 設楽博己の分析結果

を考慮すると、後期における竪穴住居数に上方修正が必要であることを推察している。

今村の分析結果は、西南関東・中部高地の竪穴住居数の動向として、加曾利EⅡ式／曾利Ⅱ式期に竪穴住居数のピークが訪れ、中期末葉に急減し、後期初頭には最低となる。その後、後期前葉に再び増加をみせるが、すぐに減少し、以降は低調となるという傾向を示している。

#### ②設楽博己の分析（設楽 2004・2017）（図4）

設楽は、後期前葉に千葉県域において再葬（多人数集骨葬）が展開する背景をさぐるため、千葉県京葉地域の集落動態を分析している。論文執筆当時の暦年校正年代幅を用いて各時期の竪穴住居数比率を算出し、より実態に近い傾向を提示している。

設楽の分析結果は、次のような動向を示す。前期に一度ピークがあり、前期終末に竪穴住居は極めて少なくなる。その後、中期中葉になると急増し、加曾利EⅡ式期に再びピークを迎える。その後、加曾利EⅢ式期まで高い水準は継続するが、加曾利EⅣ式期に激減し、称名寺Ⅰ・Ⅱ式期には最低となる。その後、堀之内Ⅰ式期に再び増加するものの堀之内Ⅱ式期で急減し、晩期終末まで低水準であるという動向である。この結果は、西南関東地域における今村の分析結果ともよく一致する。設楽は、これらの分析結果をもとに、東北北部と関東南部において集落の消長が一致することを指摘するとともに、環境変動という外的要因に焦点をあて、気候の変動と遺跡の消長、再葬の発達との関係性を指摘している。

### 2-3-2. 本稿における分析方法

対象地域において竪穴住居を集成し、地域ごとの傾

表 2 土器型式対応表

時期区分	関東地方西部・南部	関東地方北部・東部	栃木県域	東北地方南部	
早期前葉	井草			早期無文	
	大丸				
	夏島				
	稲荷台				
	稲荷原			日計	
	東山				
早期中葉	平坂	(天矢場)			
	竹ノ内				
	三戸			大平	
	田戸下層			+	
	田戸上層			明神裏III	
早期後葉	城ノ台北		(出流原)	常世	
	子母口				
	清水柳E・木の根A			機木下層 古段階	
	野島			機木下層 新段階	
				+	
	鷺ヶ島台			+	
	茅山下層			+	
	茅山上層			+	
	(下沼部)		+	※	
	野川		+	※	
	打越		+	※	
	神ノ木台		+	※	
	下吉井		+	※	
前期前葉	花積下層				
前期中葉	(ニツ木)			大木1	
	関山			大木2a	
前期後葉	黒浜			大木2b	
	諸磯a 古段階			大木3	
	諸磯a 新段階	浮島I	諸磯a		
	諸磯b 古段階				
	諸磯b 中段階	浮島II・III	諸磯b		
	諸磯b 新段階	奥津I			
	諸磯c 古段階	奥津II	諸磯c	大木4	
	諸磯c 新段階			大木5	
	前期末葉	十三菩提 古段階	十三菩提	大木6	
		十三菩提 中段階			
十三菩提 新段階					
中期前葉	五領ヶ台I 五領ヶ台II	下小野	五領ヶ台	大木7a	
中期中葉	勝坂I	阿玉台Ia 阿玉台Ib 阿玉台II	大木7b		
	勝坂II	阿玉台III 古段階 阿玉台III 新段階			
	勝坂III	阿玉台IV		阿玉台IV	
	加曾利E1 古段階	中峠	加曾利E1古段階	大木8a	
	中期後葉	加曾利E1 中段階	大木8b		
		加曾利E1 新段階			
加曾利E2 古段階		大木9a			
加曾利E2 新段階					
加曾利E3 古段階		大木9b			
加曾利E3 新段階					
中期末葉	加曾利E4	加曾利E4 古段階 加曾利E4 新段階	大木10a 大木10b		
	称名寺1	加曾利E5	(牛蛭)	門前	
後期初頭				網取I	宮戸Ib
	堀之内1			網取II	+
後期前葉	堀之内 2			西村編年中葉1段階	
	加曾利B1	加曾利B2	加曾利B3	西村編年中葉2段階	
後期中葉	曾谷			西村編年中葉3段階	
	安行 1	安行 2	安行 3	小林編年層付I段階	
後期後葉	安行 3a	安行 3b	安行 3c	小林編年層付II段階	
	安行 3d	大洞B	大洞C1	小林編年層付III・IV段階	
晚期前葉	桂台	大洞A			
晚期中葉	杉田III・千綱	大洞A'			
晚期後葉	千綱・荒海	大洞A'			

は、共伴関係が不明瞭なもの「+」は土器型式が不明瞭なもの  
----- は、次段階への遷移に検討を要す※東北南部の縄文条痕系土器について対応関係は保留とした

向や遺跡の継続に関して分析を加えた。竪穴住居のカウント方法は今村の方法に準拠し、住居の時期細別が困難な住居資料は、細別型式が確定している竪穴住居数の時期ごとの比率に応じて分配し、細別型式に加算した。住居の比定時期が3型式以上にまたがる場合は、カウントしなかった。また、住居単位の認定や切り合い関係は、報告書での調査所見に準じた。遺構の時期比定に関しては、基本的に調査報告書の所見に準拠したが、出土土器の時期比定は、すべての住居において筆者が行っており、報告書の所見と異なる部分が一部あることを断っておく。

### 3. 時間軸の設定

#### 3-1. 土器型式対応表の提示

対象地域と周辺地域との土器型式の対応関係を提示する(表2)。遺構の時期比定に有効な範囲で細別型式を用い、地域ごとの対応関係に層位的・型式学的に保証がもてるレベルにおいて細分型式を用いることを重視した。表中の土器型式の細分や対応関係の根拠は、次項で述べる<sup>3)</sup>。

#### 3-2. 栃木県域における縄文時代の土器様相

先行研究や報告書で示されてきた確実な共伴出土例や型式学的検討から各時期の対応関係を把握した。

##### 3-2-1. 早期の土器様相

本稿では、燃糸文土器(井草I式)以後を早期と捉える。東日本における早期の土器は、おおまかに燃糸文系土器群→沈線文系土器群→条痕文系土器群という3段階の変遷をたどる。ここでは、遺構の時期比定に関わる重要な点のみを、北関東資料の検討例から確認しておく。

栃木県域では当該期の遺構は多くないが、遺構外で各段階の良好な資料が検出されている。とくに中央部以南で良好な資料の報告例が多い。関東編年との対比による編年的位置付けが行われ、茅山上層式以後の条痕文系土器については出土例が少なく、栃木県域が編年的に空白となることが指摘されている(塚本1988)。栃木県域では、阿部芳郎の稲荷台式から沈線文系土器までの編年の提示(中村・阿部1992)や茂木町天矢場遺跡の第2次調査報告(中村・中村2002)での「天矢場式」の命名がある<sup>4)</sup>。

上記と先行研究の整理(金子2008・2011、原田2008、領塚2008)から対応表の表記を行った。

##### 3-2-2. 前期の土器様相

戦前から戦後の渡辺龍瑞の調査・研究(渡辺1953・1955)により、①花積下層式から十三菩提式まで南関東と同様の土器型式が北関東にも存在すること、②諸磯式の北限が那須地方であり諸磯式土器には地域差があること、③諸磯a式・諸磯b式に伴い浮島式の分布が那須地方に及ぶこと、が明らかとなっている(塚本2007b)。

周辺地域と比較して前期土器の資料は多くない。周辺地域の研究成果(新井1977・1979・1981・1989、今村1982・2010、谷藤1988、金子1989、細田1989、鳥羽1991・1996、関根2008、田中2008、松田2008)や東北南部の様相(芳賀1984)と対照して編年的位置付けが行われている。関山式か



ら諸磯式／浮島式の共伴例をもとにした東北南部との対応関係は表に示した通りである。

十三菩提式併行の土器群は、中部高地・北陸・関東・東北における地域性の発達と広域的な影響関係が指摘され、各地域における当該期の土器群の把握が試みられている（山口 1980・1984、赤塩・三上 1993、今村 2001・2006a・2006b・2010、赤塩 2008）。十三菩提式を 3 段階に区分し、それぞれの地域の併行関係を対応させるのが適切だと思われるが、本稿が対象とする栃木県域では資料に制限があり、栃木県域における前期末葉の土器群の把握が進んでおらず、十三菩提式並行土器群の位置付けの見解に一致がみられない点も多い。前期末葉土器群として十三菩提式併行と考えられる土器を一括して集成する。十三菩提式併行には大木 6 式が併行する。

本稿では、花積下層式から関山式直前を「前期前葉」、関山式・黒浜式を「前期中葉」、諸磯式併行を「前期後葉」、十三菩提式併行を「前期末葉」とする。

### 3-2-3. 中期～後期前葉の土器様相

#### ①五領ヶ台式

五領ヶ台式土器は、出土量が極めて少なく、日光市行人塚遺跡、那須町木下遺跡、塩谷町東房遺跡、矢板市上長井遺跡、益子町御霊前遺跡、芳賀町免の内台遺跡、高根沢町上原遺跡、宇都宮市鶴田中原遺跡、鹿沼市鹿沼流通団地内遺跡などで確認される。栃木県域では、今村編年（今村 1985）に対比させ理解されている（塚本 1995a・1995b）。I a（・I b・）II a（・II b・）II c の 5 段階が示され、（）表記の資料が乏しい段階を考えると大枠で 3 段階が示され、阿玉台式への過渡期として雷七類（竹ノ下式）が位置付けられている（今村 2010）。本稿で対象とした資料は、時期細分が困難であったため、五領ヶ台式 I・II 式および雷七類土器は一括して「五領ヶ台式」として時期区分を設定している。五領ヶ台式に併行する東北南部の土器は大木 7a 式と理解する。本稿では、五領ヶ台式併行期を「中期前葉」とする。

#### ②阿玉台式

塚本師也は、阿玉台式前半に西村正衛の編年（1972・1984）を、後半に埼玉編年（谷井ほか 1982）を援用し、那珂川町浄法寺遺跡の資料を位置付けた（塚本 1997）。

栃木県域において阿玉台 I a 式土器の出土資料は少ないが、日光市仲内遺跡において一定量の資料が出土しており、阿玉台 II 式以降は資料が充実する。北部で出土する阿玉台式前半に併行する大木式系土器は大木 7b 式土器であり、阿玉台 I b 式から II 式に併行すると考えられる（塚本 1997）。阿玉台 III 式は、II 式

を伴い縄文を施文しない III 式古段階と III 式のみの新段階に 2 分できる（塚本 2013）。阿玉台式期後半には大木系土器（大木 8a 式・8b 式）の出土も多くなり、阿玉台式終末期から後続する加曽利 E I 式併行期にかけて、様々な土器群が並存し、地域的な土器も成立する（海老原 1981a・2006、塚本 1997・2004b・2016・2018a・2018b）。

阿玉台 IV 式と加曽利 E I 式古段階は共伴すること（江原 1999）や中峠式と加曽利 E I 式は並存することが指摘されている（江原 2006）。塚本師也が指摘するように、加曽利 E I 式は阿玉台 IV 式が伴う段階と伴わない段階に区分される可能性が高いが（塚本 2016b）、阿玉台 IV 式の次に加曽利 E I 式古段階を置き、中峠式を阿玉台 IV 式から加曽利 E I 式古段階に併行させる表記とした。

栃木県域の阿玉台 III 式から加曽利 E I 式における大木式系土器との併行関係はいまだ不明瞭な点が多く、判然としない状況にある。塚本は、北関東での大木式系土器の変遷をたどり、会津・越後の土器を位置付けている（塚本 2018a）。塚本（2018a）や中野幸大（2008・2018）の論考を参照すると、阿玉台 III 式古段階までが大木 7b 式に併行し、阿玉台 III 式新段階が大木 8a 式古段階、阿玉台 IV 式が大木 8a 式中段階、加曽利 E I 式古段階に大木 8a 新段階が併行する。以上をふまえ、浄法寺遺跡報告書（塚本 1997）をベースにその後の塚本や江原の論考を参照して時期比定を行った。本稿では、阿玉台 I a 式から加曽利 E I 式古段階を「中期中葉」とする。

#### ③加曽利 E1 ～ E2 式

栃木県域では、埼玉編年（谷井ほか 1982）や『縄文土器大観』（鈴木・山本 1988）が適用され（合田 2007、塚原 2007）、加曽利 E I 式が 3 段階、加曽利 E II 式が 2 段階に細分されている（塚原前掲）。筆者は埼玉編年に対比させながら、加納編年（加納 1989・1994）を参考に、この段階の土器を理解している。

東北南部の土器との対応関係を整理すると、加曽利 E I 式中段階・新段階に大木 8b 式土器、加曽利 E2 式に大木 9a 式が併行する可能性が高い。

#### ④加曽利 E3 ～ E4 式

加曽利 E 式後半の編年は、日本考古学協会昭和 56 年度シンポ編年案（海老原・岩淵・岩上 1981）を基礎とし、大きな変更を迫られていない（合田 2007）ため、筆者もこの編年観を踏襲した。ただし、埼玉編年（谷井ほか 1982）や『縄文土器大観』（鈴木・山本 1988）、加納実（1989・1994）・細田勝（2003・2008）・鈴木徳雄（2007a）の検討、後藤信祐の岩坪

類型の変遷の提示（後藤 2005a）などをもとに、それぞれを 2 段階に区分している。

本稿では、加曽利 E1 式中段階から加曽利 E4 式古段階を「中期後葉」、加曽利 E4 式新段階を「中期末葉」とする。本稿でいう加曽利 E4 新段階は後述するように、栃木県域を中心とする北関東にのみ限定されるものである可能性が高く、今後検討する余地のある暫定的な段階であることを断っておく。対応する東北南部の土器型式は、加曽利 E3 式に大木 9b 式が併行、加曽利 E4 式に大木 10a 式（2 段階区分の古相）が併行することとする。大木 10 式は東北中部の事例では 3 段階区分が層位的にも妥当であるが（稲村 1997、菅原 1999）、後述する北関東—東北南部における後期初頭の土器群の問題を考慮し、現段階では 2 段階区分としておく。

表 2 ならびに上記の本稿における中期末葉から後期初頭土器群の段階設定の内容は、以下の通りである。大木 10 式の 2 細分は、胴部文様の上部への集約、胴部文様下部が相互に連結し波状区画される段階をもって大木 10a 式とした。東北南部では、胴部文様の下端が個別の文様で閉じる例も多い。この段階から、口縁部無文帯の形成、胴部文様の方形化・横方向への流れ、胴部文様下端区画の直線化を経て、大木 10b 式に至る。大木 10b 式は、無文帯化した口縁部文様帯からのモチーフの垂下、胴部文様の上部への圧縮、接する文様同士の接触部分が列点文や微隆帯で明確に区画される段階とした。大木 10a 式から 10b 式への移行段階では東北地方の各地域で地域差が顕著となり、次段階の土器型式へと要素が継続していく。今後は大木 10 式を整理し、地域ごとの段階区分を広域に対応させていく必要がある。

加曽利 E4 式新段階は、後藤信祐の岩坪類型深鉢形土器の変遷（後藤 2005a）にならい、加曽利 E4 式のなかで、波頂部の双頭突起化の出現や胴部文様の縄文帯の上下貫入の拡大、胴部無文部と口縁部無文帯の接触が生じることを指標として段階設定した。これらの特徴は、栃木県域の北部・東部を中心とした、後続する加曽利 E5 式土器の主要分布域を中心に変遷を明確に追うことが可能であると考えられる。後藤も指摘するように、称名寺式第 1・2 段階との共伴する可能性も十分高いが、栃木県内における称名寺式第 1・2 段階の様相は、後述するように不明瞭である。表 2 では前述した通り、称名寺 1 式に確実に伴う段階である加曽利 E5 式から後期初頭としているが、本稿の加曽利 E4 式新段階が後期初頭になる可能性も高い。加曽利 E5 式に本稿の加曽利 E4 式新段階を含めるかどうかなど、加曽利 E5 式の再検討も含めて、東日本における後期初頭土器群の整理を行うとともに、上記

の問題は今後の課題として解決していきたい。現時点では加曽利 E5 式になると、双頭突起化が明確となり、口縁部無文帯が拡大し胴部無文部が口縁部無文帯に貫入し、胴部文様上部縄文部の縦長化、波頂部に把手が付されるものが出現すると捉えている。

#### ⑤後期初頭 —称名寺式—

今村啓爾の編年（今村 1977）を基礎として、石井寛と鈴木徳雄による 7 段階区分（石井 1992、鈴木 1990b・1993）がある。7 段階区分編年は、現在も変更の必要性は感じられないため本稿でも採用する。

称名寺式第 1～3 段階は、西南部には確認できるが、その他の地域では殆ど確認されず、称名寺式初頭の資料が出土した遺跡は、小山市寺野東遺跡のみと指摘されている（江原 2016a）。遺構内から出土する称名寺式第 1～3 段階は殆どなく、第 4・5 段階も同様の分布状況をとるが、出土量は増加する。第 6・7 段階では出土量も増え、明確に綱取 I 式土器が共伴するようになる。

#### ⑥後期初頭 —加曽利 E 式系土器—

北関東を中心に広範囲で加曽利 E 系統の土器群が主体的に分布すること、加曽利 E 式と称名寺式が共存することは、研究の初期から意識されてきた（吉田 1960、今村 1981、石井 1992、稲村 1990）。栃木県域でも同様である（塙 1961・1973、海老原 1964）。称名寺式に併行する後期初頭の加曽利 E 式系統の土器群について、「加曽利 E IV 式」から分離して捉える必要性や「加曽利 E V 式」と呼称することが提言されてきた（石井前掲、鈴木 2007a）。

加曽利 E5 式の変遷を、鈴木徳雄と上野真由美、千葉毅が示している（鈴木 2007a・2013、上野 2011、千葉 2012・2013）。鈴木は文様から 5 分類を行い大枠の変遷を示しており、千葉は鈴木の大枠を基礎としながら 5 群分類を行い、関東における変遷を示した。その結果、関東地方では称名寺式第 1～3 段階に加曽利 E V 式と称名寺式は同様の分布を示すのに対し、第 4・5 段階には加曽利 E V 式の分布密度が低下し、第 6・7 段階には加曽利 E V 式が北関東に限定されることを明らかにした。上野は、加曽利 E IV 式と称名寺式の各段階に伴う加曽利 E V 式の共伴関係を検討した。その結果、称名寺式第 2 段階までは加曽利 E V 式と称名寺式が並存するが、称名寺式第 3 段階において加曽利 E V 式土器群の組成率が急激に低下し、称名寺式第 4 段階以降は加曽利 E 式系土器が称名寺式土器の一類型として残存することを指摘した。称名寺式中段階以降の加曽利 E 式系土器は、加曽利 E 式系土器・微隆起線文系土器等の呼称が妥当と述べてい



る（上野前掲）。

栃木県域では、浄法寺遺跡報告書（塚本 1997）や益子町御霊前遺跡報告書（合田 2000）に指摘がみられる。筆者は、称名寺式に併行する加曽利 E 系土器を加曽利 E5 式と呼称し、現段階では、称名寺 1 式に加曽利 E5 式が併行するという立場をとっておく。

#### ⑦後期前葉

市川考古博物館のシンポジウム（市立市川考古博物館 1982・1983）を基礎とし現在、堀之内 1 式土器は 3 細分案が（鈴木 1990a、阿部 1988）、堀之内 2 式土器は 3 段階の区分が広く認められ（鈴木 1999、領塚 1992）、堀之内 1 式の地域性を考慮した 6 類型分類（石井 1993）、堀之内 2 式の 5 段階区分（石井 1984）も提示されている。

栃木県域では岩上照朗（1986・1995）や江原英（初山ほか 1997）により段階区分が検討されている。堀之内 2 式の資料が少なく、特に堀之内 2 式新段階は少ない。堀之内 1 式古段階の資料も少ないが、佐野市四ツ道北遺跡 SK-1020（出居ほか 2000）で、称名寺 2 式に連続した層位的出土例がある。

本稿では、市川シンポや鈴木編年にならい堀之内 1 式・2 式をそれぞれ 3 段階に区分する。県内の共伴関係の様相から、綱取Ⅱ式を堀之内 1 式に対応させる。

#### 3-2-4. 後期中葉以降の土器様相

塙静夫は、栃木県域に曾谷式や安行 2 式が少なく、安行 2 式の分布範囲が西南部に集中し、中央部以北には瘤付土器群が波及することを指摘している（塙 1960・1961）。現在でも、塙の指摘した傾向は大きく変わらない。本稿では、先行研究（秋田 1999・2008、安孫子 1988・1989、新屋 1991・2015、大塚 1979・1984・1986・2000・2001、埼玉考古学会ほか 1992、縄文セミナーの会 1996、菅谷 1999・2008、鈴木 1981）を参考にしながら、那須塩原市槻沢遺跡報告（後藤 1995）を参照した。

本稿では、加曽利 B1 式から B3 式を「後期中葉」、曾谷式から安行 2 式を「後期後葉」とする。東北地方との対応関係は、後期中葉を西村編年（西村 2018）、後期後葉を小林編年（小林 2008）に対比させた。

1980 年代以降、小山市乙女不動原北浦遺跡・寺野東遺跡、那珂川町三輪仲町遺跡などを筆頭に、北西部を除く地域で晩期土器の資料蓄積が進み、栃木県の南北で土器様相が異なるという塙静夫の指摘（1958・1973）が追認され、北部が安行 3b 式以降、大洞系文化圏に取り込まれるのに対し、南部は東・南関東の安行式文化圏の様相とほぼ変わらないことが指摘された（三澤・福田 1982）。東部でも大洞 C2 式段階には

大洞系が主体となる（後藤 2001）が、県南半では河川流域単位で地域差がみられ、周辺地域との地域間関係が土器に表出している。

晩期後葉の出土資料は少ないが、三輪仲町遺跡で大洞 C2 式を主体に後葉までの土器が出土し、那須烏山市荻ノ平遺跡・鳴井上遺跡、宇都宮市刈沼遺跡で晩期の土器がまとまっている。大洞 A 式以降の資料は乏しい。大地域ごと地域差はあるが、安行式と大洞式の枠内で抑えられるため、山内編年（山内 1932・1934・1937・1940・1941・1964）に準拠し、地域の様相は塙静夫（1958）や川戸釜八幡遺跡報告書（片根 2011）、御霊前遺跡Ⅱ報告書（後藤 2001）、刈沼遺跡報告書（江原 2017）を参照した。

#### 3-2-5. 異なる土器群の共存

##### ①中期中葉

栃木県域は北部・東部を中心に、茨城県北部も含め、阿玉台式Ⅰa 式からⅣ式に至るまで周辺地域の影響を受けた土器群が並存する（海老原 2006、海老原・川原 1979、塚本 2004a・2016b・2018b）。

栃木県・茨城県の北部から東北南部を中心に分布する縄文地文に有節沈線で文様を描く七郎内Ⅱ群土器（松本 1982）は、阿玉台Ⅱ式からⅢ式に共存し、一部、加曽利 E1 式古段階まで存続するが、主体となるのは阿玉台Ⅲ式古段階である。茨城県を中心に分布する特徴的な大木 7b 式・スワタイプ（鈴木 1980）は、阿玉台Ⅲ式古段階から新段階に共存し、一部はⅣ式まで存続する。勝坂式は、阿玉台式の分布域が縮小するⅢ式以降、確実な共伴例に乏しくなる。阿玉台Ⅲ式新段階以降、大木系土器の影響が北部を中心に強くなり、「槻沢型」「湯坂型」（塚本 2018a）といった地域性が表出する。阿玉台式と大木式の折衷土器の例は少なく、阿玉台Ⅲ式以降と大木式土器の型式間交渉は低調である（塚本 2014b）。阿玉台Ⅳ式には前段階から続いて在地系の大木系土器が盛行し、Ⅲ式新段階から加曽利 E1 式中段階に火炎系土器が共存し（塚本 2004a・2011・2018b）、阿玉台Ⅲ式からⅣ式には焼町類型が併行する。

阿玉台Ⅳ式から加曽利 E1 式古段階には中峠式が併行する。栃木県域における加曽利 EⅠ式古段階の様相をみると、那珂川上流域では浄法寺類型（海老原・川原 1979、海老原 1981a・1999a、塚本 1997・2004a・2018b）<sup>5)</sup> が組成の中で主体を占め、槻沢型・湯坂型・スワタイプ・七郎内Ⅱ群土器が確認されなくなる。那珂川上流域では、浄法寺類型を主体として火炎系土器・胴部以下に縄文を施文する火炎系土器・大木 8a 式で構成されるほか、西南関東系要素（地文が撚糸文）と東関東系要素（口縁部区画内に縦位短沈線



を入れる) が取り入れられた在地の加曽利 E I 式古段階の土器が確認される(塚本 2016b)。那珂川中流域では、大木系土器が主体を占め、火炎系土器・浄法寺類型は少ない。那珂川上流域では、中峠式が一定量確認され、鬼怒川・小貝川流域では、中峠式を主体に口縁部文様帯の地文が縦位短沈線の加曽利 E I 式土器が分布する。中峠式は、鬼怒川・小貝川流域では分布するものの、那珂川流域で分布は希薄である。

中期中葉の後半に土器群が並存する状況が活発化するが、同地域内の隣接する遺跡間でも土器群の様相が異なることが指摘され(塚本 2014a・2015・2016a)、複数の異系統土器群が 1 地域内で共存する。加曽利 E I 式古段階には、前段階と比較すると特定地域で特定土器群が組成の中で大きな割合を占める傾向が強くなる。

## ②中期後葉

加曽利 E I 式中段階には、加曽利 E I 式土器と大木 8b 式土器が主体的に分布するようになる。加曽利 E I 式新段階には火炎系土器が、加曽利 E 2 式に入ると、浄法寺類型が栃木県北部・東部と茨城県北部で確認されなくなり、大木 9a 式と加曽利 E 2 式が主体的に分布するようになる。

栃木県域で連弧文系土器は、加曽利 E 2 式新段階から加曽利 E 3 式古段階に、曾利系土器は加曽利 E 2 式新段階以降、加曽利 E 4 式段階まで、それぞれ確認される。

栃木県域の曾利系土器の様相は、海老原郁雄(1981a・1981c)や報告書(岩淵ほか 1985、後藤 1996)、曾利系土器の論考(小暮 2004・2005、橋本 2004、戸田 2006)で指摘されるほか、合田恵美子や後藤信祐が検討を行っている(合田 2007、後藤 2009・2017)。

後藤によると曾利系土器は、加曽利 E I 式新段階から加曽利 E Ⅲ式に県内全域に分布する。小型品は搬入品・模倣品とみられ加曽利 E I 式新段階に、中型品・大型品は加曽利 E Ⅲ式段階にそれぞれ確認される。特に大形深鉢は、加曽利 E Ⅱ式に県南部、加曽利 E Ⅲ式に那珂川上流域に中心的に分布する。後藤は、加曽利 E 式後半段階を、関東南西部を経由した甲府盆地の曾利系土器の情報の一部が在地化する時期として位置付け、曾利系土器に大形深鉢が多いことは、搬入品ではなく在地化していたことを示すと指摘している(後藤 2017)。

## ③中期末葉から後期初頭

中期末葉から後期初頭に加曽利 E 式系と大木系の土器の分布域が大きく変化することが指摘されてきた

(海老原 1980・1981b)。那須地方・茨城県北部では加曽利 E 3 式併行期まで大木系が中心であり、加曽利 E 4 式併行期には加曽利 E 式系土器が主体となる。加えて、加曽利 E 式の影響を受けた在地的土器が、阿武隈川流域を中心に出現する(福島 1987・1989・1996・2012、仲田 1992)。北関東北東部から東北南部は、加曽利 E 式と大木式の分布圏の接触地域という立地上、中期末葉から後期初頭の土器群が複数認められるが、綱取 I 式以前の様相は見解の一致をみていない。加曽利 E 5 式や東北南部の在地的土器が共存し、綱取 I 式に系統的につながる綱取 I 式前段階の土器群が確認されている以上、東北南部において中期と後期を綱取 I 式の成立をもって線引きできない。大木 10 式細分の問題や大木 10 式最新段階をどこまで下らせるかも問題である。これらの点は本稿ではふれないが、当該期の時間軸の見直しは、筆者の今後の課題としたい。

北関東の称名寺式第 1・2 段階の様相をみると(江原 2016b)、この時期は加曽利 E 5 式が優占するようであり、称名寺Ⅱ式段階に綱取 I 式が浸透を強める(海老原 2008)。北部では、大木 10 式と加曽利 E 5 式が遺構内で共伴するが、東部では遺構内で加曽利 E 4・E 5 式に大木 10 式が伴うことは少なく、中央部・西南部でも同様である。綱取 I 式前段階の牛蛭式(福島前掲)の遺構内共伴は、少ないものの対象地域全域で確認でき、加曽利 E 4 式から称名寺 1 式新段階、綱取 I 式との共伴がみられる。綱取 I 式は、北部・東部の八溝山地西側に多く分布するが、西南部では殆ど確認されない。

北関東北東部から東北南部における後期初頭の土器群には解決すべき点が多いが、本稿では、大木 10a 式(2 細分の古相)は加曽利 E 4 式に併行させ、大木 10b 式(2 細分の新相)、加曽利 E 5 式、称名寺 1 式、牛蛭式を後期初頭として併行させる。その次の段階として、称名寺 2 式に綱取 I 式を併行させる。牛蛭式(綱取 I 式前段階)が称名寺 2 式段階まで存続し綱取 I 式と併存する可能性が高いが、綱取 I 式の成立をもって次の段階として線引きをしておく。

## 4. 竪穴住居数の分析結果

### 4-1. 提示する結果について

前章で提示した時間軸に基づく竪穴住居数の時期別の動向を図 5～9 に示した。

西南部を中心に、早期の炉穴が検出されている。その多くは条痕文系土器段階の例だが、確実に時期比定できる例は少ない。堀之内 2 式以降は、大型建物跡や平地式住居と報告される遺構が増加する。本稿で集成した遺跡に前期中葉の方形大形住居を除いて大型建

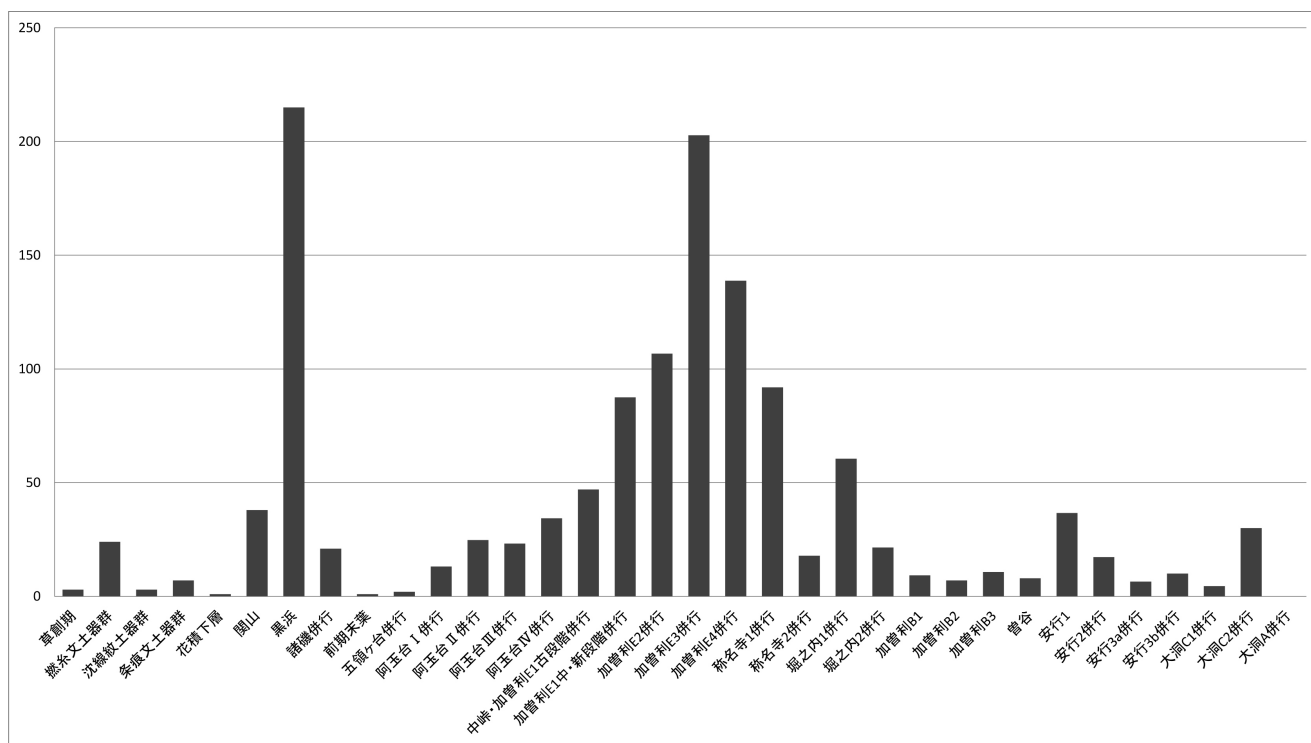


図5 栃木県域における竪穴住居数の動向 (N=1325)

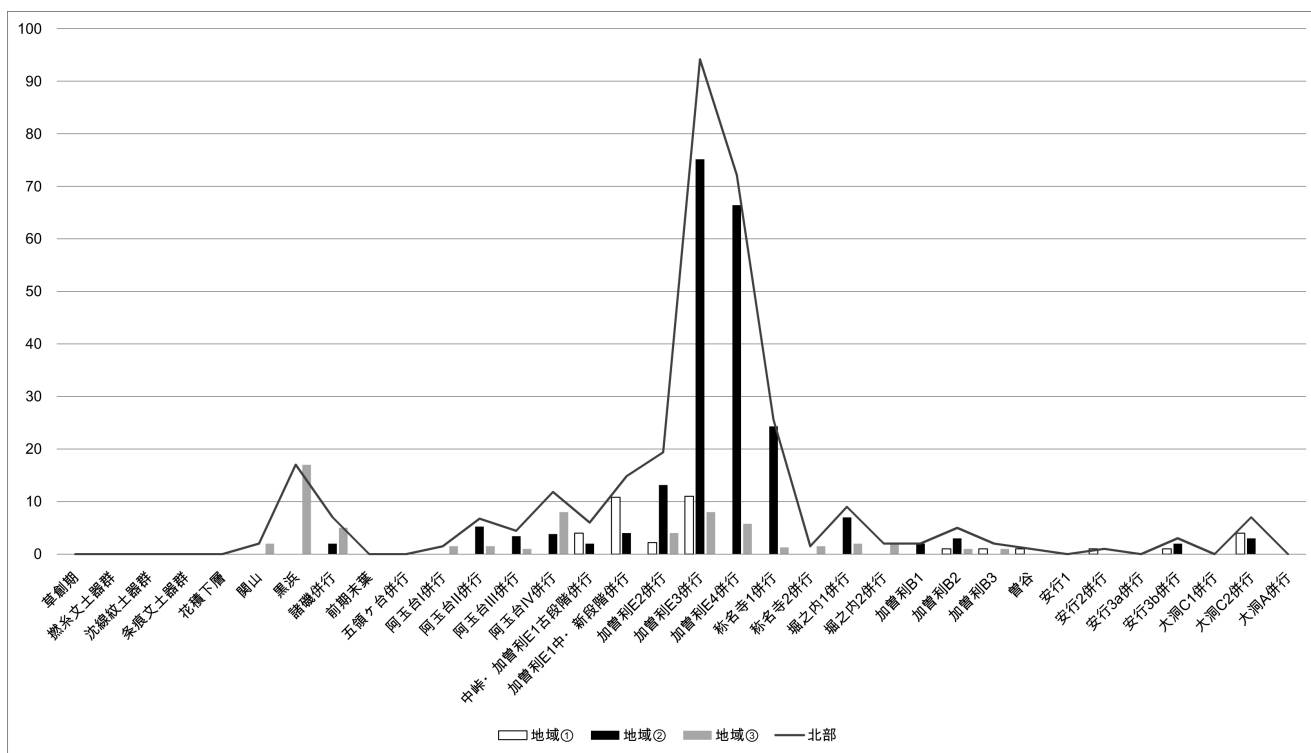


図6 北部地域における竪穴住居数の動向  
(北部：N=316、地域①：N=37、地域②：N=217、地域③：N=63)

物跡の検出例は無いが、平地式住居や掘立柱建物と推定されるものは、複数確認された。これらの遺構は、一部で中期中葉から後葉・後期初頭を含むものの後期前葉以降に確認例が増加する。平地式住居や掘立柱建物は、柱穴以外の掘り込みがないこと、時期の認定が困難なことから、短い時間幅で時期比定を行うことが困難である。本稿では、時期比定が困難である点とそ

の機能に不明な点が多く竪穴住居と同一に扱えないことから、集成には含めていない。

寺野東遺跡の環状盛土遺構内からは居住痕跡が検出されており(初山ほか 1997)、堀之内式併行期以降、特に後期中葉(加曾利B式併行)以降に、「環状盛土遺構」と現在認識している場に住居域を移した集落が、一定数存在したと考えられる。現在、環状盛土遺構は



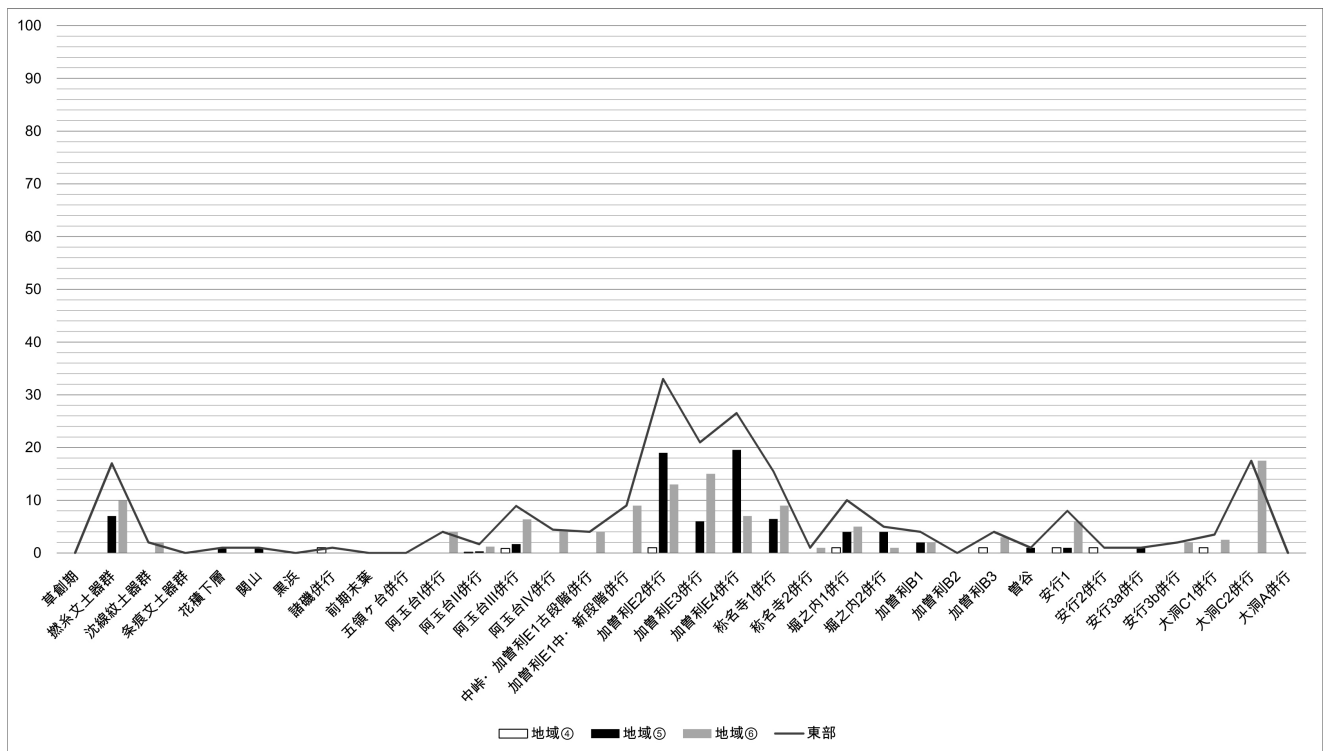


図7 東部地域における竪穴住居数の動向  
(東部：N=208、地域④：N=8、地域⑤：N=75、地域⑥：N=125)

長期に亘る居住の痕跡と考えられており、多量の遺物包含層中に後期中葉以降の居住痕跡が検出される例は東日本各地で確認され、阿部芳郎は東関東の事例を谷奥型環状遺丘集落と呼んでいる（阿部ほか 2004）。本稿の分析では、竪穴住居と認定できる遺構を集成しており、後期中葉以降の分析に上記の事情は反映されていない。筆者は、汎東日本的に加曽利 B 式併行期の竪穴住居を検出する遺跡数と竪穴住居の数が、加曽利 B 式併行の土器を検出する遺跡の数に対して少ないと認識している。その要因が検出の困難さだけで説明できるのか、竪穴住居数が後期中葉に少なくなるのかという問題が残る。同時に、環状盛土遺構や類似する遺構は居住痕跡がある一方で、祭祀関連遺物が多量に検出されることも事実である。祭祀関連遺物が増加することが、後期中葉以降の社会にとって一般的な現象であるのかといった点も含め、環状盛土遺構がどのような場であるかは、今後の検討課題である。

#### 4-2. 全体の動向

草創期・早期の竪穴住居も検出されているが、竪穴住居数が増加するのは関山式であり、後続する黒浜式には 4 倍以上に急増する。諸磯式には竪穴住居は急減し、前期末葉にはさらに減少する。五領ヶ台式期に入ると竪穴住居数は急減し殆ど確認されず、竪穴住居が検出されない遺跡も中期前葉には極端に少なくなる。

中期中葉に入ると、阿玉台 I b 式併行期から再び竪穴住居が確認され始め、阿玉台 IV 式併行期にかけて

漸増する。加曽利 E1 式中段階・新段階に竪穴住居数は急増し、加曽利 E3 式併行期まで増加を続ける。中期以降の竪穴住居数のピークは加曽利 E3 式併行期にある。

加曽利 E4 式併行期から称名寺 2 式併行期までは減少を続け、称名寺 1 式併行期から称名寺 2 式併行期には急減する。その後、堀之内 1 式に一旦増加するものの、堀之内 2 式以降は減少し、加曽利 B 式から曾谷式まで竪穴住居の構築は低調となる。

安行 1 式に竪穴住居数は増加するが、晩期に至り再び数を減らし、竪穴住居の構築が低調となる。その後は、大洞 C2 式併行期に竪穴住居が増加するが、大洞 A 式併行期以降に竪穴住居は確認されない。

#### 4-3. 地域ごとの動向

##### ①北部

関山式から黒浜式の竪穴住居は、山地や那須野が原の扇状地では確認されず、中央部寄りの地域③に限定的である。諸磯式の竪穴住居は、那須でも確認されている。北部・東部で阿玉台 I b 式の竪穴住居が確認されるのは、地域③だけであり、中央部以南とは対照的な竪穴住居の分布状況を示す。竪穴住居の構築が本格化するのには中期中葉以降であり、加曽利 E3 式併行期にピークを迎える。称名寺 1 式併行期に竪穴住居数は減少し、称名寺 2 式併行期にはさらに少なく、中央部寄りの地域③で確認されるのみである。その後、堀之内 1 式に竪穴住居は増加するが、堀之内 2 式に

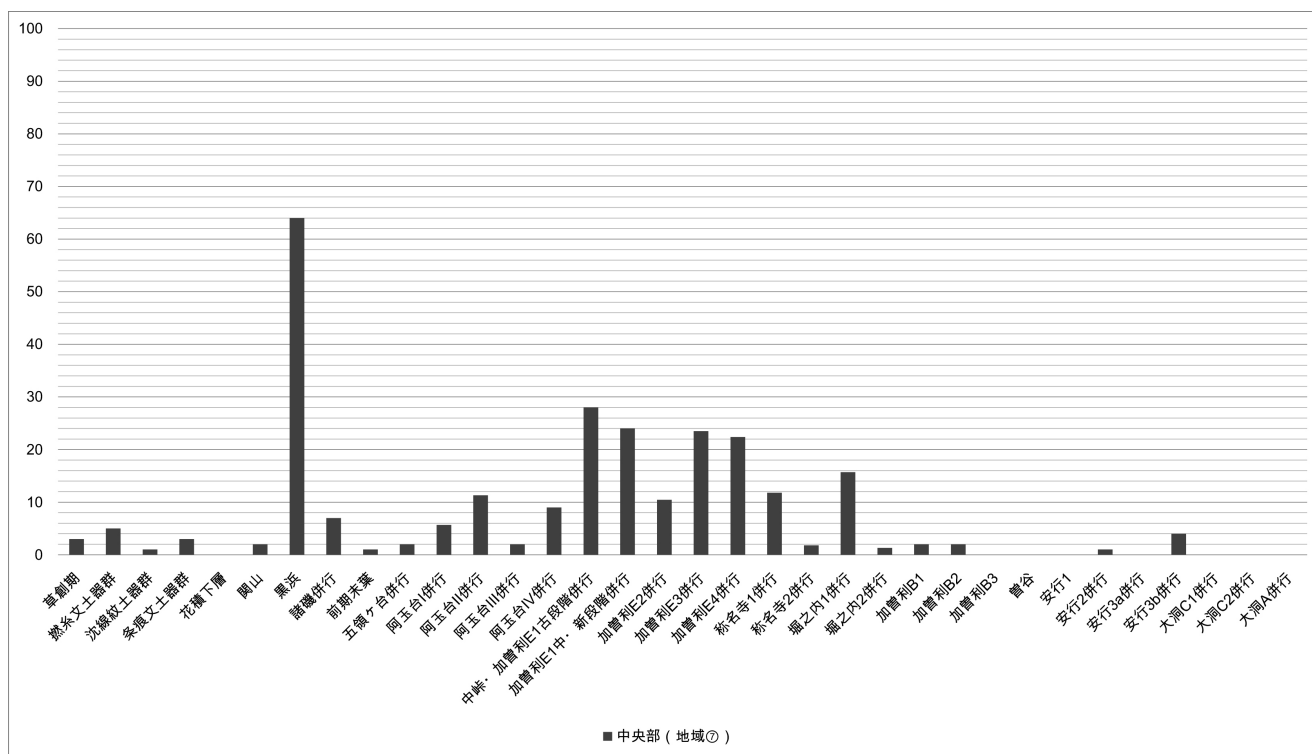


図8 中央部地域における竪穴住居数の動向 (N=264)

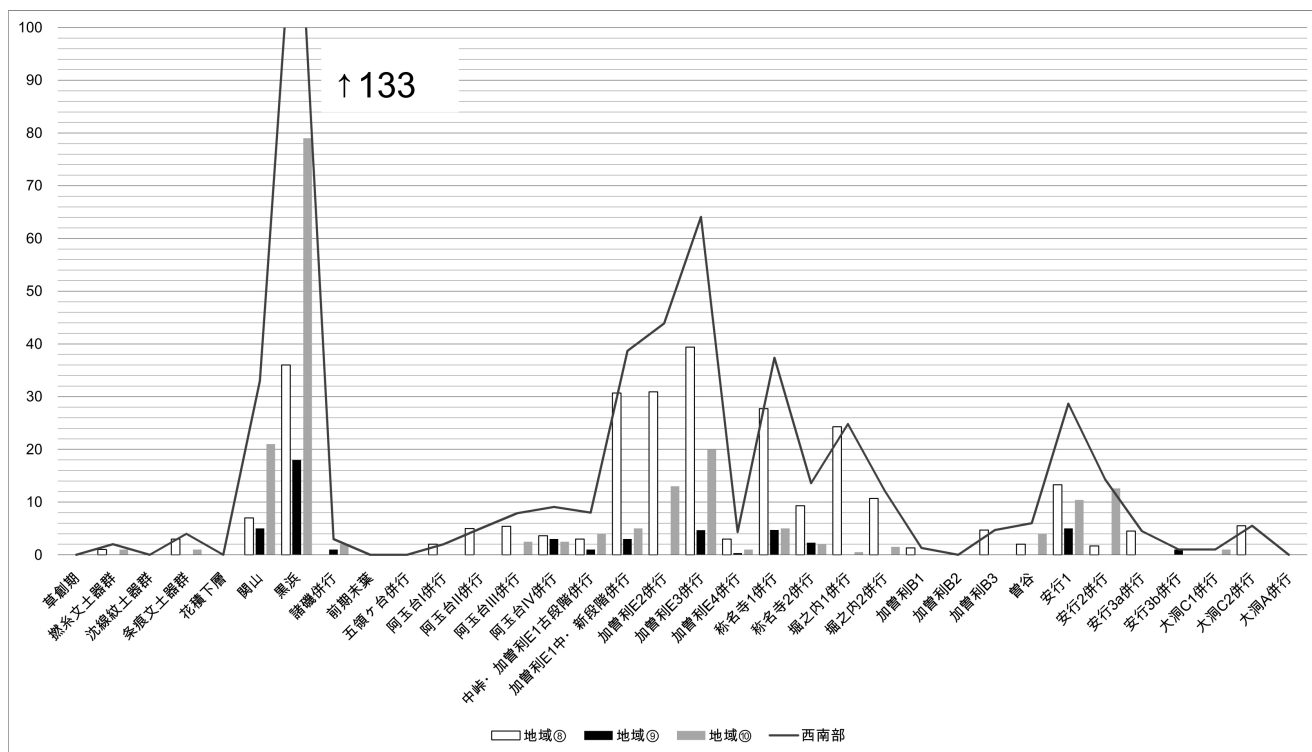


図9 西南部地域における竪穴住居数の動向  
(西南部：N=513、地域⑧：N=275、地域⑨：N=49、地域⑩：N=189)

は減少、その後は低調となり、後期後葉には殆ど確認されない。再び竪穴住居が確認されるのは、大洞 BC 式以降であり、大洞 C2 式に増加する。大洞 A 式以降、千網式も含め土器は一定量確認されるが、竪穴住居は確認されず、他の遺構の様相も不明である。

## ②東部

夏島式から稲荷原式にかけて撚糸文期の住居が安定的に確認される一方で、条痕文期や花積下層式期、関山・黒浜式期の竪穴住居は殆ど確認されない。同様に台地と低地が河川流域に広がる鬼怒川以西の中央部・西南部とは対照的である。阿玉台 I b 式併行期



から大洞 C2 式まで称名寺 1 式古段階と加曽利 B2 式を除き、継続的に竪穴住居を伴う集落が確認される。竪穴住居数は、加曽利 E2 式併行期にピークを迎える。加曽利 E2 式から E4 式併行期の間に地域⑤・⑥は異なる増減をみせるが、加曽利 E4 式併行期まで安定的に竪穴住居が確認される。その後、称名寺 1 式併行期に急減し、称名寺 2 式併行期には殆ど竪穴住居が確認されない。堀之内 1 式に再び増加し、堀之内 2 式に減少するが、減少率は他地域と比較して低い。後期中葉以降は、加曽利 B3 式・安行 1 式に竪穴住居が集中する。晩期以降は、大洞 C2 式に鬼怒川東岸や山地で竪穴住居が多く、他地域と比較しても多い。大洞 A 式以降は、土器は確認されるが遺構は確認されない。遺跡立地をみると、山地寄りの地域に多く鬼怒川・小貝川沿いには少ない。ただし、鬼怒川東岸の宇都宮市域では、竪穴住居を伴う遺跡として板戸不動山遺跡と下西原遺跡がある。本報告未確認のため集成に加算していないが、前者は 100 軒以上の竪穴住居を伴う環状集落のようで、竪穴住居の継続時期が注目される。宇都宮市上下遺跡では、加曽利 E3 式併行期以降の土坑群が確認されている。

### ③中央部

草創期や燃糸文期、沈線文期、条痕文期に竪穴住居が確認される。竪穴住居数は、黒浜式期に爆発的な増加をみせ、関山式期の 30 倍となるが、後続する諸磯式期には急減する。前期末葉から中期前葉に竪穴住居が確認されるのは県内では本地域に限られ、五領ヶ台式期の竪穴住居が確認される。環状集落状の集落形態をもつ大規模な遺跡も確認される加曽利 E1 式併行期に竪穴住居は急増し、加曽利 E4 式併行期まで安定して確認される。称名寺 1 式併行期には減少し、称名寺 2 式併行期にはさらに減少するが、堀之内 1 式に再び増加する。堀之内 2 式には急減し、加曽利 B2 式までは竪穴住居が確認されるが、加曽利 B3 式以降、後期後葉には竪穴住居が確認されず、晩期の竪穴住居も少なく、北部・東部・西南部のように大洞 C2 式併行期の竪穴住居は確認されない。

### ④西南部

関山式から竪穴住居が増加し、中央部と同様に、黒浜式に竪穴住居が爆発的な増加をみせ、特に地域⑩では旧越名沼周辺の台地上に黒浜式の竪穴住居を伴う遺跡が多数存在する。しかし、後続する諸磯式期から阿玉台Ⅱ式併行期の竪穴住居を伴う集落は極めて少ない。加曽利 E1 式後半に竪穴住居が急増し、加曽利 E3 式併行期にピークを迎える。加曽利 E4 式併行期に急減するが、称名寺 1 式併行期に再度、増加する。

思川流域を中心に称名寺 2 式から堀之内 2 式の竪穴住居は他地域と比べ多い。ただし、他の 8 小地域で称名寺 2 式併行期から堀之内 1 式併行期に竪穴住居が増加するのに対して、地域⑨・⑩では増加がみられない。後期中葉には低調になるものの、加曽利 B3 式から後期後葉に竪穴住居が多く、大洞 C2 式併行期まで継続して確認されるのが特徴である。

## 5. 分析結果の考察

本稿における分析は、竪穴住居数の集計をもとにしており、分析対象とした遺跡も竪穴住居が検出された遺跡が中心である。竪穴住居数の時空間的変遷からある程度、場の利用や定着性の強度を推定することが可能であるが、実際のところは、竪穴住居の規模・構造を把握したり、竪穴住居が検出されない遺跡も含め、様々な資料の出土状況・出土量を呈する遺跡を対象としたりして分析をしなければ、場の利用や定着性の時空間的変遷を推定することは困難である。様々な性格を持つ遺跡を分析し、地理的条件を考慮しながら遺跡の分布状況と性格から遺跡間の関係性を把握し、遺跡群としてのあり方から空間の利用状況を把握することが望ましい。さらに、移行期を検討するうえで、北関東一東北南部における後期初頭の土器群の整理が必要である。称名寺式土器と併行する土器群の北関東一東北南部における把握、加曽利 E 式系土器と東北南部の土器群との共伴関係を整理し、より細かい区分で各地域の時間軸を対応させ、遺構の時期比定や遺跡の継続期間を推定することが求められる。同時に、設楽博己が指摘したように、個々の土器細別型式が割り当てられる時間幅のバラつき（設楽 2017）や竪穴住居数をどう捉えるかという建替頻度の問題が、竪穴住居数の増減に影響を与えている可能性を考慮しなければならない。様々な課題はあるが、現時点での考察を述べる。

なお、前述したように、竪穴住居の数の捉え方により、竪穴住居数の動向に対する解釈は異なってくることが予想される（阿部 2008a）。本稿では、竪穴住居の数を構築回数として捉え、同一遺跡内における軒数は定着度を示すと考えておく。

### 5-1. その他の資料を加味した時期別の動向

#### ①草創期

隆起線文土器が大田原市川木谷遺跡・上三川町五分一上野原遺跡・真岡市稲荷山遺跡・益子町京ヶ坂遺跡・宇都宮市大谷寺洞穴遺跡・壬生町大明神遺跡、爪形文土器が上三川町大町遺跡・同町島田遺跡・茂木町登谷遺跡・大谷寺洞穴遺跡、円孔文土器が大谷寺洞穴遺跡、多縄文系土器が五分一上野原遺跡・真岡市市ノ塚遺跡・

市貝町仁王地遺跡・寺平遺跡・大谷寺洞穴遺跡で検出され、八溝山地南部西側を中心に、中央部や北部でも確認されている。宇都宮市野沢遺跡では、無文土器が竪穴住居内から検出され、隆起線文土器の終末から円孔文系土器に併行する土器として位置付けられている（後藤 2003）。

登谷遺跡では草創期後葉に比定される複数の陥し穴が列状に検出されている。同じく東部・寺平遺跡でも谷を挟んだ台地上に草創期後葉の陥し穴が複数の列をなして検出されており、寺平遺跡と同一の尾根上にある彦七新田遺跡でも陥し穴列が検出されている。八溝山地西側の山地・丘陵では、後期旧石器時代後半から終末の遺跡も多数確認されており、この地域は、後期旧石器時代後半から草創期に利用が活発だったことがわかる。

野沢遺跡では、竪穴住居出土の無文土器に付着した炭化物の AMS 測定で、SI-04（11870 ± 50BP・11760 ± 50BP）、SI-05（11390 ± 50BP）の値が得られており（パリノ・サーヴェイ株式会社 2003）、同時期の陥し穴が検出されている。宇都宮市周辺では、隆起線文から多縄文系の土器が確認されている。

## ②早期

竪穴住居を伴う遺跡は、八溝山地沿いの丘陵頂部や緩斜面上や中央部から南部の台地縁辺沿いに集中する。

北部では竪穴住居が確認されていないが、那須地域では沈線文～条痕文の土器が確認される遺跡が比較的多い。東部で竪穴住居は、撚糸文期に一定数確認されるが、沈線文期以降は確認されない。逆に、中央部で竪穴住居は、撚糸文期は夏島式に限られるが、沈線文期以降にも一定数確認される。しかし、沈線文期は田戸下層式の例のみであり、子母口式以降の条痕文期の竪穴住居も少ない。西南部では夏島式の 1 例を除き子母口式まで竪穴住居は確認されず、条痕文期に事例が増加するが少ない。

## ③前期

花積下層式の竪穴住居は、八溝山地西側の山間部に 1 例確認されただけである。ただし、花積下層式が主体で、諸磯 b 式・浮島式が確認される塩谷町佐貫洞穴遺跡や花積下層式から関山式が主体の那須町横倉岩陰遺跡があり、北部では、黒浜式前後には岩陰や洞穴も生活の場として利用されていたようである。鬼怒川東岸を含む東部は、関山式・黒浜式・諸磯式の竪穴住居が非常に少ない。同様に、北部でも関山・黒浜式の竪穴住居は非常に少なく、諸磯式には増加するが検出例は少ない。北部・東部の竪穴住居を伴う遺跡は、丘陵・台地上縁辺部で確認される。

一方で、鬼怒川以西の中央部・西南部は対照的な様相をみせる。早期末葉から前期にかけて起こった縄文海進のピーク時、東京湾は現在よりも約 60km 内陸に入り込み、古東京湾や古鬼怒湾が形成され、現在の栃木市・小山市・野木町、茨城県古河市、埼玉県加須市・群馬県板倉町にまたがる渡良瀬遊水地周辺には汽水域が出現し、ヤマトシジミ等が生息する環境だったと考えられる。西南部の野木町野渡貝塚・清六Ⅲ遺跡、栃木市篠山貝塚・城山遺跡などでは関山式～黒浜式のヤマトシジミを主体とした地点貝塚や住居内・土坑内貝層が確認されている。中央部から西南部には、関山式から竪穴住居を伴う遺跡が増加を始め、黒浜式に急増し、定着性の高まりと集落の安定化がうかがえる。中央部・宇都宮市根古谷台遺跡は、黒浜式に限定的な集落で、大型竪穴建物や掘立柱建物から構成される特異な集落構成をとる。大型竪穴建物跡は、宇都宮市古宿遺跡（関山式終末～黒浜式古段階）・大志白遺跡（関山式）や西南部・足利市神畑遺跡（黒浜式）でも確認されており、定着性の高まりの中で、この種の大型建物が出現したのだろう。

中央部・西南部でも後続する諸磯式～前期末葉に竪穴住居の数は急減し、黒浜式から継続する集落はそれまでの半数以下となり、定着性は弱まる。この傾向は、西南関東と同一である。地域②では諸磯 b 式の竪穴住居が広範囲に確認されている。十三菩提式併行の確実な竪穴住居は 1 例しかないが、黒浜式から継続する遺跡である。

前期の集落遺跡は、後続する中期の集落遺跡と重複する例は少ない。遺跡の分布傾向をまとめると、鬼怒川以西で関山・黒浜式の竪穴住居を伴う集落が非常に多く確認され、鬼怒川以东・小貝川流域や八溝山地周辺域では殆ど確認されない。この要因のひとつとして縄文海進の影響の度合いが考えられる。地域③では、黒浜式の竪穴住居は少ないが、黒浜式から諸磯式まで継続する竪穴住居を伴う継続性のある遺跡も 2 遺跡確認される。

## ④中期

五領ヶ台式期は遺構外出土の土器も少ないが、北部から東部・中央部と広範囲で確認される。鶴田中原遺跡で当該期唯一の竪穴住居の検出例がある。阿玉台 I a 式の竪穴住居を伴う遺跡も中央部で 1 軒確認されるのみである。当該期に竪穴住居を構築する居住形態ではなかった可能性も高いが、土器資料自体も少なく、炉穴・集石遺構や土坑（貯蔵穴）などの遺構の存在も明瞭ではない。判断が難しいが、同一地点を集中的に利用する居住形態ではなかった可能性が高く、定着性は低いと考えられる。



阿玉台Ⅰb式から竪穴住居や竪穴住居を伴う遺跡が増加を始める。竪穴住居は、阿玉台Ⅱ式から阿玉台Ⅳ式期に増加する。この時期は、袋状土坑の増加と群在化が顕著となる時期であり（海老原 2003）、定着性の高まりを想定できるが、阿玉台Ⅱ式以降、出土土器量と比較して竪穴住居数は少なく、定着性はそれほど高くないとも考えられる。地域⑨・⑩は、阿玉台Ⅰ・Ⅱ式併行期の竪穴住居は確認されず、阿玉台Ⅲ・Ⅳ式の竪穴住居も少ない。阿玉台式前半は、中央部の台地上に竪穴住居を伴う遺跡が集中し、阿玉台式後半に北部や東部の那珂川流域や小貝川流域、南西部に竪穴住居を伴う遺跡が拡大する。

中期後葉は定着性が最も高まる集落の安定期で、加曽利 E2 式併行期に竪穴住居が一般化する。環状を呈したり、中央広場に土坑群が配置されたりする遺跡もみられることから、同一地点の利用傾向が強くなったと考えられる。しかし、弧状配置や環状配置が確認できる時期は限定的で、中央部の宇都宮市御城田遺跡では加曽利 E1 式古段階から加曽利 E2 式古段階の期間に限定される<sup>6)</sup>。北部・東部では、環状の集落構成をはじめとする集落内の配置規制は明確ではない。全地域で、竪穴住居よりも土坑群が主体的に検出される遺跡を確認することができ、北部・東部では特に多い。この点は、土坑墓としての墓域の形成評価のみならず、中期中葉から顕著となる袋状土坑・貯蔵穴のあり方の評価とも関連する。中期後葉における複式炉の定着を含めた植物資源利用との関連を考慮し、生業形態からのアプローチを行う必要がある。

全体として、加曽利 E4 式併行期から称名寺 2 式併行期に竪穴住居跡は減少するが、中期後葉から後期初頭に継続する遺跡も多く、大規模集落にその傾向が強い。後期初頭から新たに形成される集落や後期前半に限定的な集落もある。集落内で居住の場を移動したり、新しく形成される集落遺跡は、中期集落とは場所を変えたりする例も多く存在する。竪穴住居を伴う遺跡の継続性については、次項で土器の細別型式から検討を行う。

遺跡分布の傾向をみると、中期中葉段階から継続する遺跡を中心に、その周辺に竪穴住居を伴う遺跡が点在している。各地域に長期に継続する集落遺跡が 1～2 遺跡、点在しているが、とくに宇都宮市西部から鹿沼市東部で密度が高い。一方で、鬼怒川から田川・思川流域の台地上や現・渡良瀬川遊水地周辺の前期・後期・晩期の遺跡密集地では、「拠点的」な集落の密度は高くない。中期には、地域①の日光市域の山地にも竪穴住居を伴う遺跡が確認されるようになり、一定期間の利用が確認される。

中期遺跡の立地は、中期中葉から後期前葉にかけて

限定的とみられ、後期初頭以降に新しく形成される集落は、中期の立地とは異なる地点に形成されることが多い。その一方、中期中葉から継続する遺跡は、ほぼ同じ地点で居住を続けることが多い。

#### ⑤後期・晩期<sup>7)</sup>

中期中葉以降の竪穴住居をはじめとする遺構を多数伴う大規模な集落は、後期前葉まで継続的に同一地点とその周辺が利用される場合が多い。その一方で、渡良瀬川流域や八溝山地南部西側、那須には中期末葉から後期初頭、後期初頭から後期前葉といった短期間に限定的な遺跡が一定数、確認される。また、堀之内 1 式から始まる短期間の集落は、小規模で点在する傾向がある。

後期初頭以降は、中部高地・西南関東の影響が遺構に強くみられる。中期後葉段階から栃木県域でも出入口部施設は確認されるものの、明確な出入口部として張出部をもつ柄鏡形住居が関東西南部から波及してくる。後期中葉以降、出入口部の変質（ヒゲ状ピットやコ字状溝の付帯）は、南関東と同一の変化をみると思われるが、詳細な検討はなされていない。配石遺構や敷石住居については後述する。また、後期以降、集落内の特定空間への意識が高まる（太田印刷中）。

後期中葉以降は、居住域の集約化がすすみ、県南半を中心に中央窪地型集落（江原 1999）や環状盛土遺構が形成されるようになる。寺野東遺跡のように環状盛土内に居住痕跡が集中的に確認される例や、乙女不動原北浦遺跡のように遺物包含層と居住域の単位が明確に分かれる例など、複数の集落構成パターンがあるが（江原 2009）、すべての集落が中央窪地型や環状盛土遺構を呈するわけではない（江原 2016a）。

後期中葉以降、低地や低位の微高地に集落が展開する遺跡が増加し、水場遺構などの生業に関わる遺構が明確化する<sup>8)</sup>。また、遺跡には、時期幅が限定的な遺跡と長期に継続する遺跡があることが指摘され、後者の遺跡が、思川から渡良瀬川流域に集中することから、江原英により「渡良瀬川基部遺跡群」と呼称されたことがある（江原・初山 2007）。前段階から確認される墓域等の特定空間の形成は、一部の遺跡では、この段階にさらに明確化する。

遺跡分布をみると、地域②では加曽利 B1 式～安行 2 式に至るまで竪穴住居を伴う遺跡が確認されない。地域①や東部・中央部・西南部では中期後葉から後期前葉までに継続した遺跡内で地点を変えたり、継続したりして後期中葉以降の竪穴住居を伴う遺跡が確認される。その一方で、渡良瀬川流域などの西南部では、竪穴住居を伴う遺跡が新規に形成される。

晩期の遺跡分布は、後期後半を引き継ぐものが多く、

那須では大洞 C 式に竪穴住居を伴う遺跡が新規に形成される。晩期前半は、一定規模の集落をもつ寺野東遺跡や壬生町八剣遺跡など前段階から継続する集落が数遺跡、確認される。ほかに、日光市川戸釜八幡遺跡・鳴井上遺跡・御霊前遺跡・栃木市藤岡神社遺跡で竪穴住居を伴う遺跡がみられ、北部・東部では短期間の居住痕跡が複数遺跡あり、三輪仲町遺跡や那須烏山市荻ノ平遺跡で当該期の土器がまとまって確認されている。

晩期後半は、北部の川戸釜八幡遺跡や那須地域、東部の御霊前遺跡・鳴井上遺跡で大洞 C2 式の竪穴住居を伴う集落が比較的多く確認されるが、この段階で竪穴住居の構築は終焉をむかえる。遺物をみても大洞 C2 式併行期に終焉をむかえる集落が大多数である。その後は、南関東と同様に、大洞 A・A' 式に遺跡が激減する。晩期末葉から弥生初頭にかけては土器の出土も極めて少なく、弥生への移行期は不明な点が多い。遺跡の分布傾向をみると、利根川―渡良瀬川の分岐点、思川周辺で遺跡が多く、台地縁辺平坦部や斜面、沖積低地に集落遺跡が立地する一方、山地頂上部などの高地に遺跡が営まれる場合もある。

## 5-2. 遺跡の継続性

塚本師也は、柄鏡形敷石住居の出現背景を考察するための基礎的作業として、中期から晩期に至る大規模集落遺跡を中心とした集落動態をまとめている（塚本 2017b）。

塚本によると、栃木県域で阿玉台 I b 式から晩期中葉まで各細別型式の遺物が確認されたのは、寺野東遺跡だけである。称名寺 1 式が欠落するものの同様に晩期後葉まで各細別型式の遺物が確認された遺跡として、三輪仲町遺跡、鳴井上遺跡、荻ノ平遺跡、御霊前遺跡、藤岡神社遺跡、阿玉台 I b 式から堀之内 2 式または加曽利 B1 式までが確認された遺跡として、浄法寺遺跡、那須烏山市小鍋前遺跡、桜の木遺跡、古宿遺跡、御城田遺跡を挙げている。茂木町九石古宿遺跡と八剣遺跡では、未報告採集資料も含め判断すると、阿玉台 I b 式から晩期中葉までの継続が確認されるようだ。称名寺式第 1 段階・第 2 段階が欠落する遺跡が大半であり、阿玉台 I b 式から加曽利 E 式までで完結する遺跡があるものの、阿玉台 I b 式から堀之内 2 式／加曽利 B1 式／晩期後葉まで継続する遺跡もあることを指摘し、中期末葉に集落が断絶する西南関東とは異なる傾向を示すことを指摘している。

本項では、竪穴住居数をもとにした遺跡の継続性を検討する。表 3～6 に竪穴住居の継続性を示した。

### 5-2-1. 中期中葉から中期後葉

竪穴住居を伴う遺跡は、阿玉台 IV 式併行期から加曽

表 3 中期中葉の継続性

(凡例) 竪穴住居数 - 2 軒 3～5 軒 6～9 軒 10 軒～

遺跡(立地)時期	中期前葉		中期中葉				中期後葉		
	阿玉台 Ia	阿玉台 Ib	阿玉台 II	阿玉台 III	阿玉台 IV	加曽利 E1 (古)	加曽利 E1 (中)	加曽利 E1 (新)	
地域① 仲内(山地/段丘上)									
地域② 横沢(中央部/丘陵上)									
片府田富士山(扇状地丘陵上)									
地域③ 石関(舌状台地上)									
荻ノ平(丘陵上)									
地域④ 三輪仲町(台地上)									
鳴井上(台地上)									
地域⑤ 桜の木(山地/舌状台地上)									
九石古宿(丘陵裾根上)									
地域⑥ 上の原(台地上)									
石神(台地上)									
地域⑦ 大志白(丘陵上)									
御城田(台地上)									
地域⑧ 雨ヶ谷宮(低位台地上)									
島田(台地上)									
寺野東(谷頭上)									
地域⑨ 北の内(舌状台地上)									
地域⑩ 藤岡神社(台地上)									

利 E1 式古段階・中段階で、竪穴住居の構築が一旦途切れる遺跡が多く、北部(地域②・③)や鬼怒川以東の東部、西南部の山地寄りの地域でその傾向が強い。一方、北部(地域①)や中央部、南部(地域⑧・⑨)では、阿玉台 IV 式併行期から加曽利 E3 式併行期まで継続して竪穴住居が構築される遺跡が、各地域に 1～2 遺跡ずつ存在している。

中期中葉からの継続性が低い日光山地以外の北部や東部地域でも、加曽利 E2 式古段階になると竪穴住居が構築されるようになり、加曽利 E4 式併行期まで継続する。西南部の山地寄り(地域⑨)では、中期後葉の竪穴住居は確認できない。

加曽利 E1 式中・新段階から加曽利 E4 式新段階の間で完結する遺跡も一定数存在し、東部では、竪穴住居の構築が加曽利 E4 式のみで完結する遺跡も 2 遺跡確認できる。地域④の三輪仲町遺跡では、加曽利 E4 式古段階から竪穴住居の構築が開始される。

加曽利 E2 式併行期に竪穴住居の構築が開始された遺跡は、長期継続するものは、おおむね後期初頭まで竪穴住居の構築が継続する。一方、中期中葉段階から長期継続する仲内遺跡・御城田遺跡・寺野東遺跡・藤岡神社遺跡のうち後期初頭まで継続して竪穴住居の構築が行われるのは、御城田遺跡のみである。中期前葉に出現した栃木県域に特徴的な袋状土坑は阿玉台 IV 式併行期ころから急増し、遺跡内で群在化する。これらの貯蔵穴と考えられる遺構は、竪穴住居の構築が明確でない地域も含め各地域で、堀之内 2 式まで集落内で継続する。

表 4 中期後葉から後期初頭の継続性

(凡例) 竪穴住居数 ~ 2 軒  
3 ~ 5 軒 6 ~ 9 軒  
10 軒 ~

遺跡(立地)\\時期		中期後葉						中期末葉		後期初頭						
		加曾利E1 新段階	加曾利E2 古段階	加曾利E2 新段階	加曾利E3 古段階	加曾利E3 新段階	加曾利E4 古段階	加曾利E4 新段階	称名寺 第1段階	称名寺 第2段階	称名寺 第3段階	称名寺 第4段階	称名寺 第5段階	称名寺 第6段階	称名寺 第7段階	
地域①	仲内(山地/段丘上)															
	ハツケトンヤ (丘陵上)							細別不可					細別不可			
	機沢 (扇状部/丘陵上)								細別不可(E5)				細別不可			
地域②	岩舟台(舌状台地上)									細別不可(E5)			細別不可			
	片前田富士山 (扇状地丘陵上)															
	浄法寺(段丘上)															
地域③	葺ノ木A (舌状台地上)															
	萩ノ平(丘陵上)												細別不可			
地域④	三輪仲町(台地上)									細別不可(E5)						
地域⑤	松の木 (山地/舌状台地上)									細別不可(E5)			細別不可			
	堀平 (山地/段丘上)															
地域⑥	上の原(台地上)															
	竹下(台地上)			細別不可									細別不可			
	御霊前(台地上)															
	上り戸(台地上)												細別不可			
地域⑦	御城田(台地上)									細別不可(E5)			細別不可			
	上欠(舌状台地上)									細別不可(E5)						
地域⑧	南ヶ谷宮 (低位台地上)															
	寺野東(谷頭上)										細別不可(E5)		細別不可		細別不可	
	八剣(谷頭上)												細別不可		細別不可	
地域⑨	町屋(山地・段丘上)									細別不可			細別不可			
地域⑩	西ヶ瀬北 (舌状台地上)												細別不可			
	藤岡神社(台地上)									細別不可(E5)			細別不可			

表 5 後期前葉から後期中葉の継続性

(凡例)

竪穴住居数

~ 2 軒

3 ~ 5 軒

6 ~ 9 軒

10 軒 ~

遺跡 ( 立地 ) 時期		後期初頭		後期前葉						後期中葉		
		称名寺2式	堀之内1式古段階	堀之内1式中段階	堀之内1式新段階	堀之内2式古段階	堀之内2式中段階	堀之内2式新段階	加曾利B1	加曾利B2	加曾利B3	
地域①	川戸釜八幡 ( 山地・段丘上 )											
地域②	ハツケトンヤ ( 丘陵上 )											
	機沢 ( 扇状部/丘陵上 )											
地域③	萩ノ平 ( 丘陵上 )											
地域④	鳴井上 ( 台地上 )		細別不可									
地域⑤	松の木 ( 山地/舌状台地上 )											
	九石古宿 ( 丘陵尾根上 )											
地域⑥	-											
地域⑦	御城田 ( 台地上 )											
	古宿 ( 山地平坦部 )											
	野沢石塚 ( 台地上 )											
地域⑧	寺野東 ( 谷頭上 )											
	八剣 ( 谷頭上 )											
地域⑨	-											
地域⑩	藤岡神社 ( 台地上 )											

### 5-2-2. 中期末葉から後期初頭

集中的かつ長期継続的に竪穴住居が構築された遺跡をみると、北部の一部と西南部では中期末葉に一旦、竪穴住居の構築が停止するが、北部の一部や東部・中央部では後期初頭まで継続する。北部の一部と西南部では、後期初頭に再び竪穴住居の構築が始まる一方、後期初頭に新しく竪穴住居を伴う遺跡が形成され、地域⑨などの山間部にも進出する。佐野市町屋遺跡では、柄鏡形敷石住居が検出され、中部高地・西南関東との関係が注目される。

後期初頭に新規に形成される竪穴住居を伴う遺跡は、短期間で場の利用を終える場合が多く、称名寺2式終末まで継続する遺跡は、寺野東遺跡と八剣遺跡に限られる。

### 5-2-3. 堀之内式期から後期中葉加曾利B式期

前時期から竪穴住居の構築が継続する遺跡は、寺野東遺跡と八剣遺跡に限られ、前時期からの継続性が確認できる遺跡はわずかである。

竪穴住居を伴う遺跡は、堀之内1式から堀之内2



表6 後期後葉～晩期の継続性

(凡例) 竪穴住居数 ~2軒 3~5軒 6~9軒 10軒~

遺跡(立地)時期	後期後葉				晩期			
	曾谷	安行1	安行2	安行3a	安行3b	大洞BC	大洞C1	大洞C2
地域① 川戸釜八幡(山地・段丘上)								
赤羽(台地上)								
地域② 西ッ原(山地/丘陵上)								
古の上(山地/丘陵上)								
地域③ -								
地域④ 堀井上(台地上)								
地域⑤ 九石古宿(丘陵緩傾上)								
刈沼(台地上)								
御霊前(台地上)								
地域⑥ -								
寺野東(谷頭上)								
地域⑦ 八剣(谷頭上)								
乙女不動原北浦(低位台地上)								
地域⑧ 神船(低位台地上)								
地域⑨ 藤岡神社(台地上)								

式古段階・中段階までに限定的な遺跡が多く、各地域で散見されるようになる。低地への進出を含め、新しい場への進出も要因として挙げられるだろう。堀之内2式新段階の竪穴住居は殆どなく、寺野東遺跡と八剣遺跡でも堀之内2式後半には竪穴住居が確認されないことや同一遺跡内でも居住の場を変えたり縮小したりすること、加曽利B式期に新しい地域や地点へ竪穴住居を伴う遺跡が進出することから、堀之内式期から加曽利B1式への継続性は低いと考えられる。

#### 5-2-4. 後期後葉から晩期

後期後葉に継続的な竪穴住居の構築は、地域②・③・⑦で確認できないが、前時期に竪穴住居が確認されなかった地域⑥・⑨で竪穴住居を伴う遺跡が確認される。加曽利B3式からの継続性が確認できるのは、寺野東遺跡のみである。西南部・東部では後期後葉の竪穴住居が多く、安行1式に集中する傾向がある。そのなかでも藤岡神社遺跡は、多くの竪穴住居が構築されている。北部では、日光山地の川戸釜八幡遺跡で散発的に確認されるが、その他では確認できない。

晩期の状況をみると、西南部の八剣遺跡と乙女不動原北浦遺跡や東部の山地にある九石古宿遺跡は後期後葉から安行3a式まで継続するが、その後、竪穴住居が確認できない。北部や西南部では、大洞C2式併行期まで散発的に確認されるが、集中的かつ継続的な竪穴住居の構築は確認できない。北部・川戸釜八幡遺跡は後期中葉以来、晩期中葉まで断続的に構築されている。東部では後期後葉に竪穴住居が構築された遺跡が時間を空けて、大洞BC式併行期以降に竪穴住居の構築を再開する。しかし、東部も大洞C2式併行期には竪穴住居の構築は終了する。大洞C2式併行期に各地域で竪穴住居が多いことは、その要因を含め注目される。

#### 5-2-5. 栃木県域における竪穴住居の継続性

中期中葉から中期後葉において、継続時間幅・継続時期・竪穴構築の頻度には差はあるものの、地域⑨を除いて各地域で継続的に竪穴住居の構築が行われている。中期中葉から継続する遺跡は、各大地域に少なくとも1遺跡はみられ、一部は後期初頭まで継続する。加曽利E1式古段階・中段階、加曽利E3式新段階から加曽利E4式に竪穴住居の構築が停止する遺跡がある一方で、加曽利E3式新段階や加曽利E4式から竪穴住居の構築が始まる遺跡もあり、後者の遺跡は中央部以北で多い。

中期後葉から継続する大規模遺跡や中期末葉から竪穴住居の構築が始まる遺跡は、西南部を除いて後期初頭まで継続する。西南部を含む全地域において、後期最初頭から竪穴住居の構築が始まる遺跡も存在する。このことから、少なくとも北部・東部・中央部において、中期末葉から後期初頭にかけて、竪穴住居数の激減は確認できるが、集落の崩壊や人口の激減を想定するような居住行動の「断絶」を認めることはできない。竪穴住居構築時期の継続性を評価すると、中期末葉から後期初頭に移動性の低下が考えられるが、後期初頭の新規集落の形成をみると、移動性の高まりも想定できる。

西南部では、中期中葉から継続する大規模遺跡が多い。竪穴住居の構築で継続性を判断すると、加曽利E4式併行期に空白期ができる場合が多い。中央部以北と異なり、竪穴住居の構築そのものが確認できないため、人口の激減や、それまでの居住域からの移動が想定できる。西南部のみ人口が壊滅的に激減したとは考えにくいので、後者と考えるのが妥当であろう。後期初頭になると、竪穴住居の構築が再び始まり、新規の地域や場への進出、敷石住居の構築、全体としての竪穴住居数の増加が注目される。中期末葉から新たな場に居住域を展開し、中部高地・西南関東から住居形態が波及することを考えると、西南関東からの人びとの移動も想定できるだろう。

称名寺式から堀之内式にかけて竪穴住居数は増えるが、継続性は低い。後期前葉以降、居住域の変化や生業形態も関連した低地等への進出が起きるなかで、短期間かつ散発的に竪穴住居を伴う集落が増加する。また後期前葉から後期中葉への継続性は、極めて低い。

一方で、地域⑧・地域⑩では、後期初頭から堀之内1式と加曽利B3式から後期後葉に「拠点的」な竪穴住居を伴う遺跡(寺野東・八剣・藤岡神社遺跡)が存在する。しかし、晩期に入るとこのような遺跡は殆ど確認できない。刈沼遺跡では晩期中葉の竪穴住居が多く検出されており、周辺地域を含めそのあり方が注目される。

### 5-3. 周辺地域との比較

#### 5-3-1. 南関東

古東京湾東岸・下総地域では、加曽利 E II 式新段階から加曽利 E III 式古段階の間にひとつの画期が指摘されており（加納 2000、西野 2008）、集落形態や集落分布、貝塚形成の様相に変化がみられる。加曽利 E III 式になると環状集落は解体、分散居住が一般化し、小規模集落が形成される。その一方で、一部では加曽利 E IV 式から再び集中的で定着性の高い長期継続集落の形成が開始され、堀之内式期へと継続する。このような状況は古東京湾東岸の各地でみられ、市川市権現原貝塚は中期末葉から堀之内式、同市曾谷貝塚は称名寺式から後期後葉まで継続する集落遺跡であり、松戸市一の谷西遺跡は中期末葉から後期初頭、同市金楠台遺跡は称名寺式から堀之内式、鎌ヶ谷市中沢貝塚は後期初頭から後期前葉の集落遺跡である。千葉市域でも、加曽利 E4 式から称名寺式にかけて竪穴住居を伴い継続する遺跡が複数確認できる。同様の状況は、茨城県域の那珂川下流域や利根川下流域でも確認できる。ただし、これらの地域では加曽利 E4 式期で終焉を迎える集落も一定数存在する。下総や茨城県南半では、加曽利 E2 式に大規模集落が解体するが、その後、中期末葉から後期に継続する集落が再び形成される。加曽利 E4 式から称名寺式における低数値という竪穴住居数の動向だけでは、実際の動向は把握できない。

南関東では堀之内 1 式から始まる集落が多く、小規模な集落が点在したり、斜面に貝塚や捨て場を形成したりするようになる。神奈川地域では、掘立柱建物を伴う規制の強い集落構造の遺跡も出現する。古東京湾東岸では、広範囲に居住域が展開する大規模集落や大規模貝層の形成やそれに伴う小貝層が確認できる。

これらの南関東の集落は、次段階の堀之内 2 式・加曽利 B1 式にかけて、集落内の規制が強化される傾向にあり、中期後葉以降の集落形態である「中央窪地型集落」（江原 1999）や環状盛土遺構の形成もこの変遷上に位置付けられる。加曽利 B2 式以降は、集落の集約・偏在・機能分担化<sup>7)</sup>が進行する。ただし、全ての遺跡が同一の傾向にあるわけではなく、環状盛土遺構が偏在すること（江原 1999・2009）や継続する大規模貝塚以外の貝層形成の不活発化（西野前掲）が指摘されている。大規模集落の一部が「拠点的」な集落として集約化したと考えられ、小規模集落が点在した可能性が高いが、竪穴住居の検出が困難な状況から不明瞭な点が多い。

#### 5-3-2. 東北中部・南部（阿部 2008a・2012a）

南部では、複式炉の設置が始まる大木 9a 式には、

遺跡数・竪穴住居数ともに少なく、前段階からも急減している。遺跡数・竪穴住居は大木 9b 式に増加傾向をみせ、大木 10 式古段階（3 細分最古相）にピークを迎える。大木 10 式中段階から新段階に減少傾向を示し、その後微増する。大木 9a 式に竪穴住居数が少なく前段階からも減少する傾向は、東北中部も共通する。大木 9b 式に増加傾向をみせる傾向も同じだが、中部では大木 10 式古段階に一度減少、中・新段階で増加し、その後、中部では減少する。

#### 5-3-3. 東北北部

八戸市域を中心とした竪穴住居数の通時的な把握は市川健夫の検討があり（市川 2012）、早期後葉・前期後葉・中期後葉から後期前葉にピークを認めている。早期後葉・前期後葉のピークは、栃木県域や西南関東とは異なる傾向と言え、東日本全体でみた大地域ごとの地域差である。他に、後期後半における竪穴住居数の増加と集住化傾向や居住規模の拡大傾向も西南関東・栃木県域とは異なる傾向であり、東北北部におけるこの時期の竪穴住居は、八戸市風張（1）遺跡に一極集中するようである。しかし見方を変えれば、関東における後期中葉以降の遺跡ごとの機能分担化や「拠点的」集落の出現と一致する傾向ともいえる。前述した課題をふまえた東日本全域における当該期の竪穴住居の様相を含む居住形態の解明が必要である。

阿部昭典の検討（阿部 2008a・2012a）も加味して、中期後葉から後期前葉を概観する。中期後半における竪穴住居数のピークは、青森県域の西部と東部で地域差がみられるようであり、これは関東地域も同様である。当然ながら、画一的にすべての地域が増減を示さない。中期末葉からの大規模集落の減少（岡田 1998）と後期前葉における拠点的集落を中心とした小規模集落の分散化（村木 2010）が追認されている（市川前掲）。より細かくみると、竪穴住居数は、大木 10 式古段階に減少した後、中期末葉から後期初頭段階に大きな減少は示していない。中期末葉から後期初頭の遺跡の継続性は今後、土器の併行関係の問題とともに検討の余地がある。また、後期中葉以降における「拠点的」集落を中心とした様相は関東地域と一致した動向を示していると言えるだろう。

#### 5-3-4. 北陸（阿部 2008a・2008b）

信濃川流域では、大木 8b 式併行期に竪穴住居数が増加し、ピークを迎える。大木 8b 式新段階併行から沖ノ原 I 式古段階（大木 9a 式併行）まで減少傾向が続くが、沖ノ原 I 式新段階（大木 9b 式併行）から沖ノ原 II 式新段階（大木 10 式中段階・新段階併行）に増加傾向をみせ、沖ノ原 II 式新段階で最も多くなる。



後期初頭に複式炉を伴う住居が消失し、柄鏡形住居・掘立柱建物・環状列石等の新しい文化要素が波及・受容されるが、後期前半に終焉を迎える集落が多く、後期後葉に大規模集落が再び展開し、晩期まで継続する(阿部 2009)。

### 5-3-5. まとめ

移行期における周辺地域と栃木県域の様相を表 7 にまとめた。竪穴住居数のピークや移行期の竪穴住居数の動向は隣接地域ごとに異なり、画一的な変化は示さない。

移行期において栃木県域では、県南西部(西南部と中央部、東部の南西寄りの地域⑥)が共通性をもち、県北東部(中央部より北と東部の東寄りの地域⑤)が共通性をもっている。県南西部は新潟県域や東北北部・中部と、県北東部は東北部や南関東と共通した傾向がみられ、変化の傾向の分布はモザイク状である。北部地域では、加曽利 E3 式併行期のピーク以後、称名寺 1 式併行期まで減少を続け、称名寺 2 式併行期には南に位置する地域③で竪穴住居数が増加する。この傾向自体は、西南関東や中部高地と類似するが、前述した通り、後期初頭まで継続する「拠点的」集落や中期末葉から後期初頭に限定的な遺跡も存在し、壊滅的な人口激減や集落の崩壊は想定できない。栃木県域の移行期の竪穴住居数の変化では以下の 5 点が注目される。

1. 栃木県域では、加曽利 E3 式併行期に竪穴住居の構築が最も活発化する。中央部は、加曽利 E1 式併行期にピークを迎えるが、加曽利 E2 式併行期から加曽利 E3 式併行期への竪穴住居の増加率は高い。
2. 加曽利 E4 式併行期に西南部で竪穴住居構築に空白期ができる一方、中央部では加曽利 E3 式併行期から E4 式併行期への減少率が低く、竪穴住居構築の継続性も高く、東部・地域⑤では竪穴住居が増加する。
3. 加曽利 E4 式から称名寺 1 式併行期にかけて、西南部と東部の鬼怒川東岸地域・小貝川流域(地域⑥)では、竪穴住居の構築が活発化する。中央部でも北部ほどの急減はみられない。各地域で後期初頭から竪穴住居を伴う短期間かつ小規模の遺跡が断片的に確認される。
4. 後期初頭に西南部で新規に営まれる遺跡には、典型的な柄鏡形敷石住居や称名寺 1 式古段階の土器をはじめとする西南関東の文化要素の流入が認められる。
5. 称名寺 2 式に地域③で竪穴住居数が増加するが他の地域では引き続き減少し、堀之内 1 式への継続性は低い。

表 7 移行期における関東一東北南部の竪穴住居数の動向

凡例: △:増加 ▼:減少 ?:不明		竪穴住居数の ピーク	加曽利 E3 式併 行→ 加曽利 E4 式併	加曽利 E4 式併 行→ 称名寺 1 式併行	称名寺 1 式併行 → 称名寺 2 式併行
南関東		加曽利 E2 式併行	▼	▼	?
東北	北部	加曽利 E2 式併行	▼	△	△
	中部	加曽利 E4 式併行	▼	▼	▼
	南部	加曽利 E4 式併行	△	▼	△
新潟県域		加曽利 E1 式併行	△	△	△?
栃木 県域	北部	地域②	▼	▼	▼
		地域③			△
	東部	地域⑤	△	▼	▼
		地域⑥	▼	△	▼
	中央部	加曽利 E1 式併行	僅▼	▼	▼
	西南部	加曽利 E3 式併行	▼	△	▼

加曽利 E3 式併行期に、中部高地・西南関東の連弧文系土器や曽利系土器、屋内土器埋設遺構をはじめとする諸文化要素が波及することが後藤信祐により指摘されている(後藤 2009・2017)。この状況や加曽利 E3 式併行期前後の竪穴住居の構築状況をふまえると 1 点目は、この時期に人びとの移動性が高まり、中部高地・西南関東から北・東側に対して、人びとの移動が活発になった結果と考えられる。前節で述べた継続性と周辺地域において画一的に竪穴住居が減少する傾向にないため、中期末葉から後期初頭に集落の崩壊や人口の激減は確認できない。

2・3・4 点目から、中期末葉は栃木県南半から東部・中央部への、後期初頭には栃木県北部や西南関東から県南半への人びとの移動が想定できる。各地域では、「拠点的」な集落がありながら、短期間の新しい場への集落形成が行われている。当該期における移動性の高さを想すれば、従来から指摘されている分散化も説明できる。

前節の継続性の検討結果と 5 点目からは、堀之内 1 式の移動性の高さと新しい場の選択と進出が指摘できる。この傾向は、中期末葉から後期初頭よりも強い。後期前葉以降、周辺地域においても継続性は低下する。

## 6. 諸文化要素からみる移行期の一様相

本章では、中期後葉から後期前葉において竪穴住居数の動向から推定される人びとの動きとその他の文化要素の関係性を検討するため、3 つの文化要素を取り上げる。

まず、中期後葉から後期前葉における複数の土器群が並存する様相をまとめ、特徴的な点を抽出する。次に、中期末葉から後期前葉にかけて中部高地または西南関東から栃木県域・東北地方への波及が想定されている柄鏡形を含む「敷石住居」を概観し、従来考えられてきた波及と受容の様相に対して問題提起を行う。最後に、筆者が移行期を検討するうえで有効であると考えられる土器埋設遺構(太田 2017)の様相から検討を試みることにする。





谷井・細田 1995、合田 2000、後藤 2005a、江原 2007、千葉 2012・2013)、栃木県域では、研究当初から注目されている(塙 1961、海老原 1964)。

筆者は、北関東東部から東北南部の地域において、この土器群の遺構内共伴関係を確認した。その結果、加曽利 E4 式新段階～堀之内 1 式新段階／綱取Ⅱ式、特に加曽利 E5 式／称名寺 1 式(第 2 段階～第 4 段階)に共伴例が集中することが明らかとなった。

土器群内を属性から類型化し型式学的検討を経ることで、詳細な時期幅および編年の位置付けが可能になると考えられる。共伴する文様の明確な「精製土器群」に依らない土器群内の型式学的変化とそれに基づいた時期認定や地域性の抽出を行うことが求められる。この分析については、別稿にて改めて発表することとしたい。

## 6-2. 横位土器埋設遺構

栃木県域における屋外土器埋設遺構の様相は、別稿で詳述している(太田印刷中)。

本項では、特に屋外・屋内の横位土器埋設遺構に注目する。栃木県域の横位土器埋設遺構の分布は、中期後葉から末葉に分布する土器埋設複式炉(後藤 2005b・2010)の分布域とほぼ一致することが指摘されている(後藤 2009)。

### 6-2-1. 栃木県域の分布状況

屋外横位土器埋設遺構は、北部では加曽利 E1 式併行期に確認され、主体的となるのは加曽利 E3 式併行期から堀之内 1 式である。東部では加曽利 E3 式併行期から称名寺式、中央部では加曽利 E2 式・加曽利 E4 式併行期から称名寺式、西南部では加曽利 E2 式・称名寺併行期から堀之内 1 式に、それぞれ確認される。中央部と西南部では確認されるが、事例数は北部・東部と比較して少ない。北部・東部を中心に舌状突起を有する土器が埋設土器に用いられる場合が多い。

屋内横位土器埋設遺構は、北部では加曽利 E4 式に、東部・中央部・西南部では後期初頭から後期前葉に確認され、東部・西南部では 1 つの住居に複数の土器埋設遺構が埋設され、その中に横位埋設が含まれる例も確認される。

屋外横位土器埋設遺構より屋内横位土器埋設遺構が後出となり、南に行くに従い出現時期は遅くなる。屋内土器埋設遺構が中期末葉に西南部から北部に波及した動きを受けて、横位埋設の方法が屋外土器埋設遺構から屋内土器埋設遺構に取り入れられ、屋内横位土器埋設遺構は北部から南部に逆に波及した双方向的関係が認められる。

### 6-2-2. 周辺地域の分布状況

中部高地・西南関東の屋外土器埋設遺構の様相は、別稿にて詳述している(太田 2017)。屋外横位土器埋設遺構は、山梨県域で五領ヶ台Ⅰ式と曾利Ⅲから曾利Ⅳ式、群馬県域では中期後葉と後期初頭、神奈川県域では井戸尻Ⅲ式と曾利Ⅰ・Ⅱ式、加曽利 E2 式、堀之内 1 式でそれぞれ確認されている。屋内横位土器埋設遺構は、山梨県域で新道式と井戸尻式、千葉県域で堀之内 1 式から 2 式に確認されており、検出例は多くない<sup>13)</sup>。

東北中部以北(名取川以北)における屋外土器埋設遺構全般の様相をみると、前期後葉から中期前葉に土器埋設遺構が活発に構築される時期があり、筆者は、中部高地・関東で発達する屋外土器埋設遺構とは別系譜の展開と考えている。そもそも屋外土器埋設遺構は、東北北部の例や早期南九州の例からも、機能や構築背景は様々であるが、定着性の高まりとともに意図的に構築される遺構であると考えられる。また、後期後葉以降の屋外土器埋設遺構は、晩期に太平洋側沿岸部を中心に展開する 1 遺跡に 10 基以上の例や、そのうち 3 基以上が近接して埋設される例や人骨・石器・赤色顔料等が出土する土器棺墓例・合口土器埋設遺構例と関連すると考えられる。東北中部以北の埋設姿勢をみると、屋外土器埋設遺構は正位が圧倒的主体である。屋内土器埋設遺構は、中期後葉段階に北上川上流域でひとつの住居に複数の逆位土器埋設遺構が設置される大木 8b 式期の例が発達するほかは、基本的には正位が主体であるとみてよい。

屋外横位土器埋設遺構をみると、青森県域で円筒下層 d 式から円筒上層 d 式、岩手県域で大木 8a 式から大木 9 式<sup>10)</sup>、宮城県名取川以南で、大木 6 式から大木 8a 式と後期前葉、後期後葉から晩期に確認されている。屋内横位土器埋設遺構は、明確な例が現時点で確認できない。

新潟県域の様相を阿部昭典の論考(阿部 2008a・2012b)を参考にまとめる。信濃川上流域では、沖ノ原Ⅱ式から南三十稲場式に屋外土器埋設遺構が急増することが指摘され、加曽利 E4 式から堀之内 1 式併行期に屋外土器埋設遺構が発達する。深鉢を主体として、瓢箪形注口土器や両耳壺・注口土器などが埋設土器として利用される。同時期には栃木県域でも両耳壺・注口土器の屋外土器埋設遺構が確認され(太田印刷中)、屋内土器埋設遺構でも瓢箪形注口土器や両耳壺が確認される。当該期の注口土器成立の動き(阿部 2006)が広範囲で土器埋設遺構にも反映されている。埋設姿勢は、正位・逆位のほか横位も確認されるようだ。

表 8 に栃木県北部・東部周辺地域の様相をまとめた。福島県・茨城県域の資料は、栃木県域と比較して管



見にふれた資料が少なく、遺漏も多いことを断っておく。

浜通りの土器埋設遺構をみると、屋内土器埋設遺構は、中期末葉から後期初頭の間に散発的に数例確認されるだけである。屋外土器埋設遺構は、正位系が主体で大木 8b 式から綱取Ⅱ式に構築されるが、事例数は少なく、出土例が多い時期も確認できない。ただし、後期中葉以降の土器埋設遺構は多く確認され、晩期には発達する。

阿武隈山地北部周辺では、壁際埋設を中心に大木 8b 式から後期初頭に屋内土器埋設遺構が確認される。横位埋設やひとつの住居に 2 基以上が埋設される例が数例、確認される。屋外土器埋設遺構は、大木 9a 式から綱取Ⅱ式に確認され、正位が主体だが、大木 9b 式から綱取Ⅰ式に横位埋設が一定数確認される。後期後葉以降の横位埋設例も確認される。

中通り中部では、郡山周辺、三春町周辺で多くの例が確認できる。屋内土器埋設遺構は、大木 9b 式から綱取Ⅱ式に確認され、中期末葉から後期初頭に盛行する。壁際埋設が多いものの、炉辺埋設や炉延長軸上に埋設される例が他地域より多い傾向にある。ひとつの住居に複数の屋内土器埋設遺構が埋設される例は、他地域より多く、三春町西方前遺跡では、ひとつの住居に 3～4 基の屋内土器埋設遺構が構築される住居が 2 軒確認されており、これらがすべて横位埋設である。横位埋設は、大木 10a 式に突如検出例が増え、綱取Ⅱ式まで確認される<sup>11)</sup>。ただし、中通り中部では、堀之内 1 式古段階併行以降の集落が、後期最初頭までの集落が形成される場所とは別地点に形成され、その集落内において西南関東の典型的な柄鏡形敷石住居が構築される場合が多い。後期前葉の柄鏡形敷石住居内に埋設される土器埋設遺構の埋設姿勢は、正位・正斜位が主体で、炉方向に傾斜した埋設例が多くなる。この変化は、西南関東における屋内土器埋設遺構のルールが、柄鏡形敷石住居という住居構造とともに持ち込まれた可能性を示唆している。

屋外土器埋設遺構は、大木 9a 式以降、後期初頭から綱取Ⅱ式に集中する。検出例が急増する後期初頭には、綱取Ⅰ式前段階の牛蛭式や舌状突起を有する土器が埋設土器に多用される。後期初頭から前葉には、横位埋設土器が圧倒的の主体を占める。郡山市域や三春町周辺では横位土器埋設遺構が主体を占める状況が特徴的だが、これらの地域から少し北に位置する本宮市域では、横位土器埋設遺構も多いが、同じ割合で正位・逆位土器埋設遺構が中期末葉から後期初頭に確認される。中通り中部でも地域差があるようだ。後期後葉以降も、郡山周辺を中心に確認でき、正位系が主体となるが、晩期には横位埋設も一定数、確認できる。

阿武隈山地南部周辺で確認した例は少ないが、屋内・屋外ともに正位系が主体で、横位埋設は確認できない。屋内土器埋設遺構のなかには、ひとつの住居に複数埋設する例が確認できる。なお猪苗代湖周辺では、中通りより早く土器埋設遺構の構築が始まる。横位土器埋設遺構は確認できないが、逆位土器埋設遺構が多い傾向にあるようだ。会津の詳しい様相は確認できていない。

浜通りや阿武隈山地北部・南部では、正位系埋設が主体となり、横位の屋外土器埋設遺構は確認されない。また、これらの地域では後期前葉以降の屋外土器埋設遺構の出土数が多くなる。阿武隈山地を挟んで東西で土器埋設遺構の様相が大きく異なる状況は、当時の地域間関係を反映しているものと思われる。後期中葉以降、浜通りを中心に、1 遺跡に 10 基以上集中する例や同時期の遺構が群集して埋設される例が増加する<sup>12)</sup>。

茨城県域では、屋内土器埋設遺構は少なく、ひとつの住居に複数の土器埋設遺構が構築される例も少ないが、利根川下流域では茨城県内の他地域と比較して発達する。埋設姿勢は、正位が主体的で、横位埋設は利根川下流域でわずかに確認できる。利根川下流域では加曽利 E2 式新段階から、その他の地域では加曽利 E4 式から、堀之内 1 式期まで確認できる。

屋外土器埋設遺構は、地域ごとに様相が異なる。利根川下流域では、中期中葉・後期中葉・後期後葉にわずかに確認され、加曽利 E3 式から堀之内 1 式に集中する。正位系が圧倒的に主体であり、横位埋設は非常に少ない。県北は沿岸部を中心に、中期中葉と称名寺式から堀之内 1 式に事例が集中する。後期中葉以降にも確認される例は、浜通りと同様に、晩期にかけて沿岸部に出現する土器埋設遺構と関連するだろう。これらは、正位が主体で横位埋設は確認できない。

那珂川下流域では、横位埋設が非常に多く、加曽利 E4 式古段階から称名寺 1 式古段階に集中する。舌状突起を有する土器も横位埋設土器に用いられている。

### 6-2-3. 横位土器埋設遺構が盛行する地域

北関東東部から東北南部において土器埋設遺構は、加曽利 E3 式併行期から後期初頭にかけて阿武隈山地北半沿いや利根川下流域、那珂川流域で発達する。このうち、那珂川流域を除く地域では屋内・屋外ともに土器埋設遺構が発達している。中通り中部では屋内土器埋設遺構が著しく発達する一方、那珂川流域では屋外土器埋設遺構が発達するのに比して、屋内土器埋設遺構は低調である。

しかし、屋内土器埋設遺構の内容をみると、ひとつの住居に複数の土器埋設遺構を構築する傾向は、中通



表8 北関東東部―東北部における土器埋設遺構の動向

凡例：			～3基	土器埋設遺構の消長							ひとつの住居に 複数基構築された屋内土器埋設遺構 とその時期	
地域・埋設姿勢\時期				大木8b	大木9a	大木9b	大木10a	後期初頭	網取I	網取II		
			加曽利E1	加曽利E2	加曽利E3	加曽利E4	後期初頭	称名寺2	堀之内1			
茨城県東部・ 濁沼周辺	屋内	正位系・逆位系										
		横位										
	屋外	正位系・逆位系										
		横位										
茨城県・ 利根川下流域	屋内	正位系・逆位系									正位1+横位1（称名寺1）1軒 正位2（称名寺1）1軒	
		横位										
	屋外	正位系・逆位系										
		横位										
茨城県・ 那珂川下流域	屋内	正位系・逆位系										
		横位										
	屋外	正位系・逆位系										
		横位										
栃木県東部・ 八溝山地南部西・ 那珂川中流域	屋内	正位系・逆位系									正位2（網取I）1軒 正斜1+横位2（後期初頭）1軒 逆位2（加曽利E4）1軒 逆位1+正斜合口1（加曽利E4）1軒	
		横位										
	屋外	正位系・逆位系										
		横位										
栃木県北部・ 那珂川上流域	屋内	正位系・逆位系									正位1+逆位1（加曽利E3）1軒	
		横位										
	屋外	正位系・逆位系										
		横位										
福島県・ 中通り中部	屋内	正位系・逆位系					22基				横1+正1（網取II）1軒、正3（後初）1軒 正1+横1（後初）1軒 横3（中末）1軒 横4（大木10a）1軒、ほか7軒あり	
		横位										
	屋外	正位系・逆位系					35基		19基			
		横位					66基					
福島県・ 阿武隈山地北部	屋内	正位系・逆位系									正位1+不明1（大木10b）1軒 正位2（大木9b）1軒	
		横位										
	屋外	正位系・逆位系				20基						
		横位										
福島県・ 阿武隈山地南部	屋内	正位系・逆位系									正位2（大木10a）1軒	
		横位										
	屋外	正位系・逆位系										
		横位										
茨城県・ 北部沿岸	屋内	正位系・逆位系									正位2（堀之内1）1軒	
		横位										
	屋外	正位系・逆位系										
		横位										
福島県・ 浜通り	屋内	正位系・逆位系										
		横位										
	屋外	正位系・逆位系										
		横位										

り中部と八溝山地西側の栃木県東部山地で共通する。加えて、その中に横位埋設が含まれることも共通するが、中通り中部では屋内土器埋設遺構に占める横位埋設例が圧倒的に多い。この両地域の間にある、那珂川上流域では屋内土器埋設遺構に横位埋設の多用傾向がみられない。

屋外土器埋設遺構をみると、中通り中部で屋内横位埋設が発達するのと同時期に、那珂川流域では屋外横位埋設が急増する。栃木県東部山地でも同時期に屋外横位埋設は発達するが、那珂川流域ほど発達はない。表8をみると、中期末葉から後期初頭における那珂川流域と中通り中部の屋外横位埋設の発達が著しいことが分かり、特定地域に集中する。また、横位埋設は屋外が屋内に先行するという傾向が栃木県域以外の地域でも確認できる。

横位土器埋設遺構の属性をみると、2つの点が注目される。一つ目は、那珂川流域と中通り中部では前述

した「舌状突起を有する土器群」が埋設土器として多用されることである。二つ目は、中通り中部では屋外土器埋設遺構を中心に、「舌状突起を有する土器」が多用され、底部穿孔が多数確認されることである。底部穿孔は、屋内・屋外土器埋設遺構ともに栃木県域では低調であり、横位には確認されず、正位系に多い（太田印刷中）。上記をふまえると、那珂川流域と中通り中部において横位土器埋設遺構が著しく発達し、「舌状突起を有する土器」が埋設土器に多用されるが、底部穿孔は中通り中部でのみ発達するという共通性と地域性が確認できる。

地域性や土器埋設遺構に基づく地域間関係については、さらに当該地域の検出例を検討する必要があるが、中期末葉から後期初頭に那珂川流域と中通り中部に強い土器埋設遺構の共通性があることは間違いないだろう。横位土器埋設遺構は、後期前葉には衰退するとみられる。信濃川流域では同時期に横位埋設が展開

するようなので、他の属性も含め周辺地域との関係を検討し、横位土器埋設遺構の消長とその背景を検討する必要がある。

### 6-3. 住居内敷石行為

柄鏡形住居と関連付けられ、多くの研究が蓄積されてきた（阿部 2000、石井 1998、山本 1996・2002・2012）。栃木県域の研究史は、塚本師也に詳しい（塚本 2007・2017b）。後藤信祐は、那須地域における敷石住居の成立を炉周辺の敷石に求め、西南関東で発生源とされる奥壁部からの発達ではなく、炉辺部から敷石が発達した可能性を指摘している（後藤 2007）。後藤と同様の指摘は、福島県域でも森貢喜（1974）、鈴鹿良一（1986）、鈴鹿良一・押山雄三（1989）らにより行われている。

栃木県域の中期後葉から後期初頭における住居内敷石行為をみると、柄鏡形敷石住居と推定される遺構は、中期末葉～後期初頭に出現し、称名寺式・堀之内式に存在し、堀之内 2 式には構造が変容する。加曽利 B 式以降は、他地域と同様に張出部構造が出入口施設に変化すると考えられるが、この変容プロセスの詳細は不明である。

栃木県域では北東部を中心に加曽利 E2 式併行期より出入口部施設（張出・対ピット・溝・横穴）を伴う竪穴住居が確認される。これらが、部分敷石とともに柄鏡形敷石住居の受容／非受容の素地となった可能性が高い。柄鏡形敷石住居は、大田原市平林真子遺跡、茂木町河原台遺跡、荻ノ平遺跡、さくら市勝山遺跡、古宿遺跡・御城田遺跡で後期初頭から後期前葉の例が確認でき、北部・東部から中央部の県北半に分布する。明神前遺跡でも検出されているが、詳細が確認できない。住居形態は、西南関東のものと大きな違いはない。非柄鏡形敷石住居・非敷石住居と柄鏡形敷石住居・敷石住居の組成率が、中央部の古宿遺跡のみが半数を敷石住居が占めるのに対し、柄鏡形敷石住居が多く分布する東部では柄鏡形敷石住居の組成率が低いことを指摘した塚本師也は、西南関東に近い県南部よりも県中央部で柄鏡形敷石住居が主体的となる理由を検討する必要があること、それが山間部という立地に関連する可能性を述べている（塚本 2017）。

古宿遺跡は、住居域の中心に後期初頭から後期前葉の大型配石遺構が存在し、それに関連する屋外土器埋設遺構も構築されている。配石遺構は、栃木県域では古宿遺跡以外では塩谷町佐貫環状列石や明神前遺跡例を除くと、小規模で形状も不明瞭な例が多く、栃木県域で不活発な遺構であり、どのような背景のもと古宿遺跡で配石・敷石関連遺構が著しく発達したのかを検討することが重要である。川戸釜八幡遺跡では、群馬県

域の影響を受けた後期中葉から後葉の石棺墓が確認されている。配石遺構の背景には、多方向からの影響を想定しなければならない。

住居内敷石行為に話を戻すと、住居奥壁部を含む壁際に敷石がされる例は、中央部より北には殆どない。また、中央部より北の地域では、炉周辺や柱穴周辺を中心に部分的に敷石がなされる場合が多い。このような炉や柱穴の廃絶に関わる敷石と思われる例は、加曽利 E3 式併行期から加曽利 E4 式併行期に複数例確認される。

塚本は、大規模集落遺跡の消長の検討から、栃木県域では中期末葉から後期初頭における「集落の断絶」は確認できないことを述べ、山本暉久（1979・2000）の主張するような西南関東における中期末葉から後期初頭の集落の断絶と、それに応じた共同体意識の変化や個別住居構成員による祭祀の活発化といった現象で、栃木県域における柄鏡形敷石住居の受容要因を説明できないことを指摘する。一時的・突発的な要因ではなく、伝統的な中部高地・西南関東の遺構・遺物の選択的・部分的受容の一環として柄鏡形敷石住居を捉えている（塚本 2017）。

栃木県域において、炉・柱穴の廃絶に関連する部分的な敷石行為が行われた住居の時期は、中期後葉であり、西南関東の典型的な敷石行為が北関東・東北地方に波及した時期より古い。栃木県北部から福島県南部では、中期後葉段階に在地的な敷石行為が発達しており、このことが、その後の西南関東を中心とする典型的な住居内敷石行為や柄鏡形敷石住居を受容する素地となった可能性が高い。

対象地域において住居内敷石行為をひとつの文化要素として捉え、具体的な説明を行うには、阿部昭典の研究（2008a）のように、住居内構造や住居内付属施設の集成・分析に基づいて、東日本の各地域における住居構造の地域間関係をより具体化する必要がある。

ここでは、住居内敷石行為が一系統的かつ一方向的に西南関東から北関東さらには東北地方へ波及しただけでなく、受容する各地域との双方向的な関係性の中で拡散していった可能性を指摘したい。受容の背景にはそれを受け入れる在地的文化要素が存在していたのだろう。敷石住居は、敷石住居の構造的分析や典型的な敷石住居が定着する前の住居構造の分析、集落内・遺跡群内における竪穴住居と柄鏡形を含む敷石住居の関係性など分析する課題が多くある。柄鏡形を含む敷石住居の系統的な問題や北関東―東北南部における受容の背景は、上記の疑問点の検討をふまえて改めて論じていきたい。

以上3つの要素から、移行期における栃木県域の様相は、中央部を境に様相が大きく南北に二分されることが判明した。また、下記のような状況が推定できるだろう。

加曽利 E3 式併行期には、関東において西側から東側・南側から北側へ向けて、人びとの移動の方向性が強まったと考えられると前述した。筆者はこの時期に、東部を一部含む栃木県北半は中通り中部とともに中部高地・西南関東の文化要素を部分的に受容しながら、在地的な文化要素を生成し、東北南部や那珂川流域における文化要素の共通性を高めていき、ひとつの地域圏を形成していたと考えている。それは、本稿でも取り上げた「住居内敷石行為」「横位土器埋設遺構」「舌状突起を有する土器群」からもみてとれる。加曽利 E4 式以降も後期前葉まで栃木県中央部以南を介した諸文化要素の波及を受けながらも、在地性を維持し続けるが、堀之内 1 式期に強い共通性は解消される。この時期には、南関東の諸文化要素が北部や中通り中部でも在地文化の延長上に受容される。同時に、前段階からの集落の継続性は弱まり、移動性が高まり新規の集落形成が始まったと考えられ、大枠として、南関東の土器や住居形態をはじめとする諸文化要素の広域文化圏のなかに取り込まれると考えられる。

一方で、西南部を中心とした栃木県南半は、中期後葉以降、南関東との共通性を強めていく。中期末葉から後期初頭にかけては、竪穴住居数の増加とともに、新しい場への進出がみられ、典型的な柄鏡形敷石住居をはじめとする西南関東の文化要素が流入する。単純に考えれば、これらの動向は、同時期に竪穴住居数が減少する西南関東から栃木県南半への北向きの人びとの移動が想定できる。しかし、この点は推論の域を出ず、埼玉県域や茨城県南部をはじめとする周辺地域における諸文化要素の様相から今後、慎重に判断していかなくてはならない。

## 7. 結論

本稿における結論を2点に焦点をあてて述べる。

### ①移行期における「竪穴住居の激減」の評価について

中期後葉から後期初頭における竪穴住居の急激な減少は、東北から関東の全ての地域で起こる現象ではなく、その増減のタイミングや度合いには地域差がある。前章では地域ごとの増減の関係や竪穴住居が構築される時期の継続性、集中度、竪穴住居を伴う遺跡の動向から移動性の高さについて言及した。そして、他の文化要素からもその動きは想定可能であることも示した。しかしながら、竪穴住居の数をどう捉えるかにより、竪穴住居数の動向の解釈は大きく異なる。人口の増減を直接的に示さないことは、今村や設楽をはじ

め多く指摘されており、他の指標と合わせて考えなくてはならない。

本稿では、竪穴住居の数を構築の回数として捉え、同一遺跡内で軒数が多くなれば、定着性の強化と解釈してきた。その結果、中期後葉から後期初頭における竪穴住居数の減少はあるものの、隣接する地域ごとに増減傾向も異なることが分かり、東日本における画一的な竪穴住居数の減少ならびに竪穴住居を伴う遺跡の減少は起きていないことが判明した。移行期より、称名寺式併行期から堀之内 1 式や後期中葉以降の時期において竪穴住居を伴う遺跡の継続性の希薄さが目立つ。現時点では、これらの背景に移動性の高低があることを想定しているが、竪穴住居を伴わない遺跡の評価や他の文化要素の動向と関連付けながら、移動性については考えていかななくてはならない。現時点では、土器や土器埋設遺構、住居遺構から地域間関係と人びとの移動についてアプローチする見通しがたっているが、今後の課題としたい。

いずれにせよ、移行期における広域的かつ画一的な人口の激減を想定するような集落の崩壊や居住痕跡の喪失等の現象は考古学的に確認できないことは指摘できる。

### ②移行期の北関東北東部―東北南部における地域性

竪穴住居数の検討から、移行期において顕著な集落の「断絶」がないこととともに、栃木県域の中央部を境に南半と北半でその様相が異なることが明らかとなった。南半は竪穴住居数の増加とともに新しい場も含めた新規の竪穴住居を伴う集落の形成が起こる。土器や住居遺構の様相からも、この背景には、西南関東からの人びとの移動や関係性の強化を想定できる。一方で北半では竪穴住居数の減少はみられるものの、中期後葉から継続する「拠点的」集落が継続するとともに後期初頭からの竪穴住居を伴う集落が確認され、移動性が高まった可能性がある。この背景を他の文化要素から考えてみたい。

土器の様相をみると、後期初頭から後期前葉にかけて南半では西南関東との関係が強くなり、関東圏に取り込まれていく一方、北半は、茨城県北部や東北南部とともに、加曽利 E 式土器の影響を強く残す地域であり、中期末葉から称名寺 1 式併行期まで在地性の強い土器を含めた複数の土器群が共存する様相が確認できる。

屋外土器埋設遺構の分析からは、栃木県域が地域性を有することがわかっている（太田印刷中）。中期末葉から後期前葉にかけて北半（北部・東部）に強い地域性が確認でき、同様の特徴は、茨城県北半・福島県中通りにも同時期に共通する。栃木県北東部から福島



県中通りが文化要素に共通性を持つのは、土器や屋外土器埋設遺構だけではない。中期後葉から末葉には、西南関東の典型的な敷石行為とは異なる在地的な敷石行為が存在していた可能性が高い。中期後葉から末葉には、動物形象突起が八溝山地を中心に栃木県北半・茨城県北半・福島県南部に集中することが指摘されている（海老原 1993、後藤 1996・2009、長山 2014）。加曽利 E3 式併行期以降、後期前葉まで、時には茨城県北半を含めながら栃木県北東部から福島県中通りに共通性の高い文化要素が展開していた。この地域は、前述したように中部高地・西南関東の文化要素を、加曽利 E3 式併行期の前後に生じた在地的文化要素の延長線上に部分的に受容している点が注目される。

移行期における諸文化要素の動向をみると、栃木県域は中期中葉以降、東北地方と中部高地・西南関東からの影響の狭間で、県南半は西南関東の文化圏に取り込まれる一方で、県北半は地域性を顕在化させながら、茨城県北半や福島県中通りとの地域間関係を強めていったことがわかる。一方で、栃木県北東部―福島県中通りが、中期後葉から後期初頭に東北中部以北や中部高地・西南関東からの影響を受けなかったわけではなく、恒常的に双方向的な影響関係が存在していたと考えられる。このように移行期は、関東地域・東北地域では一括りに出来ない地域性が発露する。この様相については、竪穴住居数の分析からみる人びとの動きを他の文化要素から検証することのみならず、本稿で挙げた諸文化要素の共通性や系統性のさらなる検討から確認していく必要がある。特に、北陸地域や東北中部以北との諸文化要素からみる関係性の把握が求められる。その際には、中期末葉から後期初頭における同一時間軸に基づく考古資料の検討が必要である。本文中でも述べたように、当該期の可能な限り細分した広域的な土器型式の対応関係を整理することで、各考古資料の消長や継続性を地域ごとに把握し、同一レベルで並べて検討できるようにするべきである。

以上のように、移行期の社会は、北関東の一部をみただけでも、画一的な評価は与えられない。各考古資料の様相が文化要素としてどのような関係性をもって推移したかを可能な限り細かいレベルで検討する必要がある。

本稿は、前述した通り、検討に不十分な点が多く、課題も散見される。しかし、移行期において縄文社会には画一的かつ一方向的な社会変化があったのではなく、広域的に影響を与えた社会・自然環境変化に反応した、様々な諸文化要素の変化と地域性の発露があった可能性に具体的な考古資料の変化からアプローチすることができた。

今後は、より具体的に諸文化要素の関係性を分析・説明し、広域的な諸文化要素の比較から移行期の社会の変容プロセスを具体化していきたいと考えている。

## 謝辞

本稿は、2017 年度に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した修士学位論文の一部に修正を加え、まとめたものである。

指導教員である佐藤宏之先生には日頃から懇切丁寧な指導を賜っており、大貫静夫先生、設楽博己先生、福田正宏先生には研究室内での発表を通じ、ご指導いただいた。また、以下の諸先生・諸氏からご指導・ご教示を賜り、調査にあたり以下の諸機関にお世話になりました。末筆ながら、記して心より感謝申し上げます。

石川岳彦、猪瀬亜沙美、小川慶一郎、笠見智慧、國木田大、熊谷晋祐、熊木俊朗、佐々木由香、夏木大吾、西村広経、藤岡ひとみ、山下優介、吉松優希、領塚正浩、市川市立市川考古博物館、公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター

（五十音順・敬称略）

## 註

- 1) 海老原都雄は、那須・塩谷地域における土器と複式炉の研究から、関東系土器と大木式土器の関係性を追究し、栃木県北部と茨城県北部を合わせた地域を「接圏」と呼称した（海老原 1997・1999b・2008）。後藤信祐は、土器や複式炉の分析から（後藤 2005a・2005b・2007・2010）、「接圏」と同一地域において、横位土器埋設遺構・複式炉・動物形象突起などの遺物・遺構が共通する要素として存在することを推定しており、周辺地域も含め検討を深めることにより、「この時期（筆者註：中期末葉から後期初頭）の他の遺構や遺物についても消長や分布を明らかにすることにより、加曽利 E と大木の両文化圏の狭間に位置する本県（筆者註：栃木県）の縄文時代中期から後期への移行期の様相が、ヒトの移動を含め鮮明になるものと思う」（後藤 2009:p.190）と指摘している。
- 2) 住居の時期比定は、原則として床面・床面付近から出土した土器の型式から行った。住居と認定可能な遺構内から出土した土器が破片・小破片で時期が 1 型式単位で認定できない場合や、床面・床面付近からの土器出土がなく、覆土中に 3 型式以上の土器が混在している場合は、カウントの対象としていない。
- 3) 加曽利 E 式・称名寺式土器の表記について、筆者はアラビア数字を採用している。ただし、先行研究の記載に関しては、その著者が採用する数字表記を用いて表記した。
- 4) 阿部芳郎は、茂木町天矢場遺跡資料（中村ほか 1972）を加え、市貝町堀込遺跡の資料を検討し、稲荷台式（堀込第Ⅱ群）→稲荷原式（堀込第Ⅲ群）→東山式（天矢場第 3 類）→平坂式（堀込第Ⅳ群）→口縁部に幾何学文が入る擦痕文土器→沈線文系土器群、という編年を提示した。中村らは、平坂式に併行する無文土器として「天矢場式」（天矢場第 1 類）を位置付け、竹ノ内式に伴う擦痕文土器との差異を指摘している（中村ほか 2002）。また、阿部は、佐野市出流原遺跡から出土した常世式に類似する土器の検討から「出流原式」を提唱し（阿部

1999)、矢板市雲入遺跡(塙・田代 1966)で確認されていた常世式類似土器を「出流原式」に先行する土器として位置付けた。橋本淳は、独自性を認めながらも「出流原式」の型式設定には慎重な姿勢をみせている(橋本 2005)。近年、中村信博は、沈線文土器の終末期ならびに燃糸文土器群を大田原市品川台遺跡出土資料から検討し、子母口式古段階併行段階や東山式と天矢場式を繋ぐ段階へと資料の位置付けを行った(中村 2011a・2011b)。

- 5) 中期中葉に中通りから栃木県北部を中心に分布する火炎系土器の胴部施文に在地的手法が取り入れられた類型である。加曽利 E I 式期に磨消技法が出現するまでの期間併行して存続する。他の火炎系土器よりも施文規範が強いのが特徴である(塚本 2016b)。
- 6) 地域⑥の鬼怒川東岸は、本稿の集成に含めていない宇都宮市板戸不動山遺跡がある。111 軒分の中期環状集落が検出されている。
- 7) 後期・晩期の遺跡はそれぞれが、資源利用や居住形態の一部分を占めたり、一部分に特化したりして、一定の範囲で各遺跡が有機的関係を構築し、地域社会を形成していた可能性が非常に高い(阿部 2014、阿部ほか 2000)。そのため後期初頭以前よりも、竪穴住居等の遺構を伴わない遺跡の評価が重要となり、遺物出土量や組成の傾向に目を向け、居住形態や生業形態を考える必要がある。
- 8) 寺野東遺跡では、中期末葉から後期初頭と後期前葉、後期中葉から晩期前半の水場遺構が複数確認され、居住域に近接する(初山ほか 1997、江原ほか 1998)。鹿沼市明神前遺跡でも後期初頭から中葉の水場遺構が構造的に調査されているが(永岡 2000・2002、永岡ほか 2006)、本報告を現時点で筆者は確認できていない。
- 9) 加曽利 E 式系土器が称名寺 2 式の新段階まで残る群馬県域をはじめ、下越地域や東信地域、古東京湾東岸でも類例が確認される。正確な分布圏と中心域との関係性については改めて検討したい。
- 10) 北上市梅ノ木遺跡で大木 8a 式の礫を伴う、九戸村田代Ⅳ遺跡で大木 9 式の硬玉製玉 2 点を伴う横位埋設例が確認されている。
- 11) 郡山市町 B 遺跡では、綱取Ⅱ式の幼児骨を埋納した横位土器埋設遺構例が、福島市和台遺跡からも舌状突起を有する土器に幼児骨を埋納した横位埋設例が確認されている。岩手県域では玉類を伴う、栃木県域では礫・石器が伴う横位埋設例が、それぞれ確認されている(太田印刷中)。これらに墓機能を類推することは可能だが、現段階では資料・根拠に乏しい。
- 12) 後期中葉以降の群集埋設例は、骨や赤色顔料をはじめとして遺物を伴う例が多く、墓的・祭祀的性格がうかがえる。福島県域をみると大熊町道平遺跡では、晩期の動物骨等を伴う祭祀の様相の強い群集埋設例(渡辺・大竹編 1983)があり、中通りでも福島市宮畑遺跡で晩期の掘立柱建物と関連のある群集埋設例(齋藤・堀江 2005)が確認されている。
- 13) 南関東では、堀之内 1 式期に住居主体部に屋内横位土器埋設遺構が埋設される例が多いことが、石井寛により指摘されている。北関東北東部一東北南部の中期末葉から後期初頭の例との関連性が指摘され、堀之内 1 式期における土器埋設遺構や綱取式を介した地域間関係が指摘されている(石井 2011)。この点は、本稿で検討した地域の成果もふまえ、さらに検討を行う必要があるが、石井の指摘するように地域間の影響がこの時期に強くなったことは間違いない。千葉県域では古東京湾東岸を中心に、中期末葉から後期初頭に柄鏡形住居に伴う屋内土器埋設遺構が、後期初頭から後期前葉には屋外土器埋設遺構が発達し、特に堀之内 1 式に発達する傾向がみとれる。後期初頭から後

期前葉における古東京湾沿岸地域の屋外土器埋設遺構例の中には明確な人骨が出土する土器棺機能を持つ例も多いが、これらの例で横位埋設が優占する傾向はみられない。堀之内 1 式期には市川市株木東遺跡で、屋外の横位土器埋設遺構が(小西ほか 1983、堀越 2000)、千葉市大膳野南貝塚で小児骨を埋納した屋外横位土器埋設遺構が検出されている(国際文化財株式会社ほか編 2014)。横位土器埋設遺構は、中期末葉から後期前葉の北関東北東部一東北南部のほか、後期後葉以降の太平洋沿岸地域に、合わせ口の横位土器埋設遺構を含めて発達する傾向にあり、土器棺機能を有するものも一定数みられる。後期後葉以降の屋外横位土器埋設遺構例が、中期末葉から後期前葉に発達した横位土器埋設遺構と関係性を持つかどうかは、現段階では不明であり、検討を要する。

## 図版出典

図 1, 2 : 山口 2001 の 3 ページ第 1 図をもとに筆者作成

図 3 : 今村 1997

図 4 : 設楽 2017

図 5 ~ 9 ・表 1 ~ 8 : 筆者作成

図 10 : 後藤 1996

図 11 : 国土地理院地図をもとに筆者作成

**主要参考文献** 集成に用いた報告書等は紙幅の都合上、割愛した。  
赤塩仁 2008 「十三菩提式土器」『総覧縄文土器』: 304-311、アム・プロモーション

赤塩仁・三上徹也 1993 「下島式・晴ヶ峯式の再提唱とその意義」『中部高地の考古学』Ⅳ : 61-102

秋田かな子 1999 「関東地方後期(加曽利 B 式・曾谷式)」『縄文時代』10 第 1 分冊 : 332-341

秋田かな子 2008 「加曽利 B 式土器」『総覧縄文土器』: 594-603

安孫子昭二 1988・1989 「加曽利 B 様式土器の変遷と年代(上)(下)」『東京考古』6, 7 : 1-33, 29-37

阿部昭典 2000 「縄文時代中期末葉～後期前葉の変動―複式炉を有する住居の焼失と柄鏡形敷石住居の波及―」『物質文化』69 : 1-39

阿部昭典 2006 「注口土器成立期以前の様相」『考古学ジャーナル』550 : 10-15

阿部昭典 2008a 『縄文時代の社会変動論』未完成考古学叢書 6、アム・プロモーション

阿部昭典 2008b 「沖ノ原式土器」『総覧縄文土器』: 472-479

阿部昭典 2009 「新潟県における縄文後期集落の様相」『考古学ジャーナル』584 : 14-18

阿部昭典 2012a 「東北地方における後期初頭の社会変動―越後からみる縄文社会」『東北地方における中期/後期変動期 4・3ka イベントに関する考古学現象①』: 1-16

阿部昭典 2012b 「縄文後期初頭における集落構造・居住形態の変容と地域間関係」『津南シンポジウムⅧ予稿集 三十稲場式土器文化の世界―4.3ka イベントに関する考古学現象②―』: 79-90

阿部芳郎 1988 「堀之内 1 式土器の構成と変遷」『信濃』40(4) : 1-23

阿部芳郎 1999 「縄文時代早期後葉土器編年における北関東地方の様相―栃木県佐野市出流原遺跡出土土器の型式学的検討―」『駿台史学』106 : 23-40

阿部芳郎 2014 「縄文時代における長期継続型地域社会の形成と土偶祭祀ネットワークに関する研究」『明治大学人文科学研究所紀要』75 : 196-216

阿部芳郎/建石徹/小口英一郎/堺陽子/宮本淳一 2000 「縄文



- 後期における遺跡群の成り立ちと地域構造—印旛沼周辺遺跡群の踏査と研究の成果—』『駿台史学』109：35-93
- 阿部芳郎／君嶋論樹／芝原祐子／鈴木宏美／法量郷子／堀寛子／松丸信治 2004 「縄文時代後・晩期における谷典型遺丘集落の研究—千葉県佐倉市曲輪ノ内貝塚の調査方法を考える—」『駿台史学』122：83-108
- 新井和之 1977 「植房貝塚の土器とその周辺」『奈和』15：39-51
- 新井和之 1979 「黒浜式土器小考」『日本考古学研究所集報』Ⅱ：4-21
- 新井和之 1981 「黒浜式土器」『縄文文化の研究』3 縄文土器Ⅰ：109-200
- 新井和之 1989 「黒浜式土器 5 分案から見た 3 分案の問題点」『奈和』27：43-47
- 新屋雅明 1991 「大宮台地における縄文時代後期末から晩期初頭の土器群について」『埼玉考古学論集』：393-414, 埼玉考古学会
- 新屋雅明 2015 『縄文時代後・晩期土器編年の研究』六一書房
- 石井寛 1984 「堀之内 2 式土器の研究（予察）」『研究集録』5：1-47, 横浜市埋蔵文化財センター
- 石井寛 1992 「称名寺式土器の分類と変遷」『研究集録』9：1-70, 横浜市埋蔵文化財センター
- 石井寛 1993 「堀之内Ⅰ式期土器群に関する問題」『牛ヶ谷遺跡・華蔵台遺跡』：271-289, 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 石井寛 1998 「柄鏡形住居址・敷石住居址の成立と展開に関する一考察」『縄文時代』9：29-56
- 石井寛 2011 「縄文時代後期の住居址内土坑」『縄文時代』22：43-72
- 市川健夫 2012 「八戸市内における縄文時代の竪穴住居跡数と居住規模」『研究紀要』八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館：11-20
- 稲村晃嗣 1990 「加曽利 E 系列の土器群」『調査研究集録』7：9-16, 横浜市埋蔵文化財センター
- 稲村晃嗣 1997 「Ⅳ考察 111 号住居跡覆土出土遺物について」『横欠遺跡（本文編）』北上市埋蔵文化財調査報告第 30 集：25-47
- 今福利恵 2008 「勝坂式土器」『総覧縄文土器』：392-401
- 今村啓爾 1977 「称名寺式土器の研究（上）・（下）」『考古学雑誌』63(1)(2)：1-29, 22-60
- 今村啓爾 1981 「柳沢清一氏の「称名寺式土器論」を批判する」『古代』71：24-34
- 今村啓爾 1982 「諸磯式土器」『縄文文化の研究』3 縄文土器Ⅰ：211-223
- 今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年—その細分および東北地方との関係を中心に—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』4：93-158
- 今村啓爾 1997 「縄文時代の住居址数と人口の変動」『住の考古学』：45-60, 同成社
- 今村啓爾 2001 「十三菩提寺前半期の系統関係」『土曜考古』25：37-66
- 今村啓爾 2006a 「大木 6 式土器の諸系統と変遷過程」『東京大学考古学研究室研究紀要』20：37-69
- 今村啓爾 2006b 「松原式土器の位置と踊場系土器の成立」『長野県考古学会誌』112：1-32
- 今村啓爾 2010 『土器から見る縄文人の生態』, 同成社
- 岩上照朗 1979 『北の内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 31 集
- 岩上照朗 1986 『古宿遺跡』上河内村文化財調査報告書第 5 集
- 岩上照朗 1995 「栃木県における堀之内Ⅰ式土器」『唐沢考古』13：1-12
- 岩淵一夫／初山孝行／岩上照朗 1985 『上欠遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 69 集
- 上野真由美 2011 「加曽利 E 式土器の終焉と称名寺式土器の関係」『研究紀要』25：77-108, 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 江原英 1999 「寺野東環状盛土遺構の類例 —縄紋後・晩期集落の一形態を考える基礎作業」『研究紀要』7：1-56, 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 江原英 2006 「阿玉台式の伝統と「中峠 0 地点型」の成立（覚書）—寺野東遺跡と島田遺跡出土土器の観察から—」『栃木県考古学会誌』27：67-98
- 江原英 2007 「東関東の様相」『第 20 回セミナー中期終末から後期初頭の再検討』：121-211
- 江原英 2009 「関東地方の縄文後期集落」『考古学ジャーナル』584：9-13
- 江原英 2016a 「栃木における縄紋時代後晩期の研究」『とちぎを掘る 栃木の考古学の到達点』：90-99, 随想舎
- 江原英 2016b 「北関東地域の様相」『称名寺貝塚と称名寺式土器』平成 27 年度三菱財団人文科学研究助成 企画展「称名寺貝塚」関連シンポジウム：93-114, 横浜市歴史博物館
- 江原英 2017 『刈沼遺跡・刈沼向原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 388 集
- 江原英・合田恵美子 2001 「栃木県における縄文時代中期後半～後期前葉の土器」『第 23 回栃木・福島研究協議会』
- 江原英・初山孝行 2007 『寺野東遺跡 環状盛土遺構をもつ関東の縄文集落』日本の遺跡 23, 同成社
- 江原英／谷中隆／森嶋秀一／津野仁／猪瀬美奈子／井上武 1998 『寺野東遺跡Ⅳ 縄紋時代谷部編 -1』栃木県埋蔵文化財調査報告第 208 集
- 海老原郁雄 1964 「脇沢遺跡発掘 T3 の遺物について」『栃木考古学研究』5：1-6
- 海老原郁雄 1981a 「4 中期の土器 第二章縄文時代 三縄文土器」『栃木県史』通史編 1：112-121
- 海老原郁雄 1981b 「北関東の大木式土器」『縄文文化の研究』4 縄文土器Ⅱ：32-42
- 海老原郁雄 1981c 「栃木県『加曽利 E 様式』における異系土器」『栃木県考古学会誌』6：25-32
- 海老原郁雄 1993 「加曽利 EⅣ式期の動物把手」『翔古論聚—久保哲三先生追悼論文集』：1-12, 久保哲三先生追悼論文集刊行会
- 海老原郁雄 1997 「接圏の敷石住居」『奈和』35：87-107
- 海老原郁雄 1999a 「関東地方中期（浄法寺タイプ）」『縄文時代』10 第 1 分冊：308-317
- 海老原郁雄 1999b 「接圏の縄文中・後期文化」『企画展よみがえる縄文人』：100-114, ミュージアム氏家
- 海老原郁雄 2003 「縄文集落と土坑域の形成」『栃木の考古学』塙静夫先生古希記念論文集：131-144
- 海老原郁雄 2006 『那須の縄文土器—「黒埴の里」草創の時代—』, 大田原市黒羽芭蕉の館
- 海老原郁雄 2008 「接圏 称名寺式土器の地域相」『那須文化研究』22：31-40
- 海老原郁雄・岩上照朗・桜岡正信 1980 「栃木県内の称名寺式土器」『栃木県考古学会誌』5：1-12
- 海老原郁雄・岩淵一夫・岩上照朗 1981 「縄文土器 10 段階区分図（栃木県）」『日本考古学協会昭和 56 年度大会シンポジウムⅠ北関東を中心とする縄文中期の諸問題』
- 海老原郁雄・川原由典 1979 『湯坂遺跡』大田原市教育委員会
- 太田圭 2017 「縄文時代における屋外土器埋設遺構の研究—「埋甕」のこれまでとこれから—」『アーキオ・クレイオ』14：1-12



- 1-26, 東京学芸大学考古学研究室
- 太田圭 印刷中 「栃木県域における縄文時代の屋外土器埋設遺構」『アーキオ・クレイオ』16, 東京学芸大学考古学研究室
- 大塚達朗 1979 「安行式土器をめぐるⅠ—成立に関する予察—」『考古学研究ノート』: 29-33
- 大塚達朗 1984 「寿能泥炭層遺跡出土の加曽利 B 式土器の様相」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』人工遺物総括編: 821-830, 埼玉県立博物館
- 大塚達朗 1986 「安行 1 式土器型式構造論基礎考」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』5: 1-40
- 大塚達朗 2000 『縄紋土器研究の新展開』, 同成社
- 大塚達朗 2001 「曾谷式土器再考の視点」『土曜考古』25: 67-94
- 岡田康博 1998 「東日本の縄文文化」『季刊考古学』64: 31-35
- 片根義幸 2011 「第 3 章川戸釜八幡遺跡 第 4 節縄文時代の遺物と遺構」『川戸釜八幡遺跡・石仏遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 338 集: 84-128
- 金子直行 1989 「縄文前期中葉における大型菱形文系土器群の成立と展開」『埼玉考古』25: 3-50
- 金子直行 2008 「条痕文系土器」『総覧縄文土器』: 138-145
- 金子直行 2011 「条痕文土器群の成立とその意味—土器群の変化からみる縄文早期社会の面影について—」『縄紋時代早期を考える』: 39-50
- 加納実 1989 「千葉県における加曽利 E 式土器後半の様相」『第 3 回縄文セミナー 縄文中期の諸問題』: 217-254
- 加納実 1994 「加曽利 E Ⅲ・Ⅳ式土器の系統分析—配列・編年の前提作業として—」『貝塚博物館紀要』21: 1-41, 加曽利貝塚博物館
- 加納実 2000 「集落的居住の崩壊と再編成—縄文中・後期集落への接近方法—」『先史考古学論集』9: 63-104
- 合田恵美子 2000 「第 6 章調査の成果 第 1 節縄文時代の遺構・遺物について (1) 縄文時代の遺物について」『御霊前遺跡Ⅰ (第二分冊)』栃木県埋蔵文化財調査報告第 236 集: 175-184
- 合田恵美子 2007 「第 4 章縄文時代 第 2 節土器研究 5. 中期末葉～後期前葉」『研究紀要』15: 136-146, 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 国際文化財株式会社・(株) 玉川文化財研究所共同企業体 (編) 2014 『大膳野南貝塚発掘調査報告書』第 2 分冊—本文編 2—
- 小暮伸之 2004 「福島県出土の曾利系土器について」『福島考古』45: 17-26
- 小暮伸之 2005 「富岡町前山 A 遺跡出土の太木 8b・9 式土器—キャリアー形深鉢の変遷と異系統土器について—」『福島考古』46: 15-24
- 後藤信祐 1995 「第 4 章調査の成果 第 2 節遺物について」『槻沢遺跡Ⅱ』栃木県埋蔵文化財調査報告第 164 集:
- 後藤信祐 1996 『槻沢遺跡Ⅲ』栃木県埋蔵文化財調査報告第 171 集
- 後藤信祐 2001 『御霊前遺跡Ⅱ』栃木県埋蔵文化財調査報告 248 集
- 後藤信祐 2003 「第 5 章調査の成果 第 2 節野沢遺跡 (1) 縄文時代草創期について 2. 遺物について」『野沢遺跡・野沢石塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 271 集: 386-394
- 後藤信祐 2005a 「堂ヶ原遺跡の複式炉の再検討—栃木県における複式炉の終焉—」『研究紀要』13: 25-40, 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 後藤信祐 2005b 「栃木県における複式炉の諸相」『日本考古学協会 2005 年度福島大会シンポジウム資料集』: 167-180
- 後藤信祐 2007 「那須町向山神社跡遺跡の石組複式炉の再評価」『栃木県考古学会誌』28: 13-28
- 後藤信祐 2009 「栃木県における縄文中期後半～後期前半の「埋甕」の様相」『野洲考古学論—中村紀男先生追悼論集—』: 171-192, 中村紀男先生追悼論集刊行会
- 後藤信祐 2010 「加曽利 E の複式炉・太木の複式炉—掘り方・埋設土器の相違からみた槻沢遺跡の複式炉の検討—」『研究紀要』: 3-18, 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 後藤信祐 2017 「栃木県における曾利式系土器の様相」『研究紀要』25: 13-34, 公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
- 小西ゆみ／花輪宏／宮内勝己／石田勝 1983 「4. 株木 B 遺跡第 2 地点」『昭和 57 年度市川東部遺跡群発掘調査報告』: 17-56, 市川市教育委員会
- 小林圭一 2008 「瘤付土器」『総覧縄文土器』: 568-877
- 埼玉考古学会・土偶とその情報研究会 1992 『埼玉考古シンポジウム 縄文時代後・晩期安行文化—土器型式と土偶形式の出会い』
- 齊藤義弘・堀江格 2005 『史跡宮畑遺跡』福島市埋蔵文化財報告書第 180 集
- 設楽博己 2004 「再葬の背景—縄文・弥生時代における環境変動との対応関係」『国立歴史民俗博物館研究報告』112: 357-380
- 設楽博己 2017 『弥生文化形成論』, 塙書房
- 縄文時代文化研究会 1999 「縄文土器全国編年表」『縄文時代』10 表
- 縄文セミナーの会 1996 『第 9 回縄文セミナー後期中葉の諸様相資料』
- 縄文セミナーの会 1997 『第 10 回縄文セミナー前期中葉の諸様相』
- 市立市川考古博物館 1982・1983 『シンポジウム堀之内式土器資料集・記録』
- 菅原哲文 1999 「山形県における縄文時代中期の土器様相—中期後半の編年を中心として—」『山形考古』6 (3): 37-55
- 菅谷通保 1999 「加曽利 B3 式の考え方—東関東からの視点」『土曜考古』23: 21-30
- 菅谷通保 2008 「曾谷式・後期安行式土器」『総覧縄文土器』: 604-611
- 鈴木良一 1986 「複式炉と敷石住居」『福島の研究』1 地質考古編: 144-174, 清文堂
- 鈴木良一・押山雄三 1989 「福島県における縄文時代中期末葉から後期前葉の住居址」『シンポジウム縄文の配石と集落 三春町西方前遺跡と柴原 A 遺跡の問題点』資料集・討議集, 三春町教育委員会
- 鈴木徳雄 1990a 「称名寺・堀之内 1 式土器の諸問題」『第 4 回セミナー縄文後期の諸問題』: 1-48
- 鈴木徳雄 1990b 「称名寺式土器」『調査研究集録』7: 17-92, 横浜市埋蔵文化財センター
- 鈴木徳雄 1991 「称名寺式の変化と文様帯の系統」『土曜考古』16: 25-68
- 鈴木徳雄 1993 「称名寺式の変化と中津式」『縄文時代』4: 21-51
- 鈴木徳雄 1999 「関東地方 後期 (堀之内式)」『縄文時代』10 第 1 分冊: 324-331
- 鈴木徳雄 2007a 「称名寺式土器研究の諸問題」『第 20 回縄文セミナー中期終末から後期初頭の再検討』: 1-58
- 鈴木徳雄 2007b 「称名寺式と異系統土器の共存の問題—諸類型の形成過程と土器群の編成 (覚書)—」『縄紋社会をめぐるシンポジウム V 縄紋社会の変動を読み解く 予稿集』: 51-70
- 鈴木徳雄 2013 「称名寺式前後の土器の存在形態と変化—土器系統の存在形態と器種の推移—」『公開シンポジウム予稿集 関東甲信越地方における中期 / 後期変動期 4.3ka イベントに関する考古学現象③』: 51-69

- 鈴木裕芳 1980 「第 7 章成果と課題 第 2 節諏訪遺跡出土の第 6 群土器について」『諏訪遺跡発掘調査報告書』：185-187, 日立市教育委員会
- 鈴木正博 1981 「遺物特論Ⅱ—加曾利 B 式（古）研究序説—」『取手と先史文化—中妻貝塚の研究—』下巻：1-80, 取手市教育委員会
- 鈴木保彦 1986 「中部・南関東地域における縄文集落の変遷」『考古学雑誌』71(4)：30-53
- 鈴木保彦・山本暉久 1988 「加曾利 E 式土器様式」『縄文土器大観』2 中期 I：325-330, 小学館
- 関根慎二 2008 「諸磯式土器」『総覧縄文土器』：283-289
- 田中和之 2008 「羽状縄文系土器」『総覧縄文土器』：234-241
- 谷井彪／宮崎朝雄／大塚孝司／鈴木秀雄／青木美代子／金子直行／細田勝 1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』1：1-137, 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷井彪・細田勝 1995 「関東の大木式・東北の加曾利 E 式土器」『日本考古学』2：37-68
- 谷藤保彦 1988 「二ツ木式土器」『群馬の考古学』創立十周年記念論集：89-106, 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 千葉毅 2012 「三十稲場式期における「関東系」土器群の様相」『津南シンポジウムⅧ予稿集 三十稲場式土器文化の世界—4.3ka イベントに関する考古学現象②—』：101-110
- 千葉毅 2013 「関東甲信越地方における称名寺式土器と加曾利 E V 式土器の混在の様相」『公開シンポジウム予稿集 関東甲信越地方における中期／後期変動期 4.3ka イベントに関する考古学現象③』：23-34
- 塚原孝一 2007 「第 4 章縄文時代 第 2 節土器研究 4. 中期初頭～後葉」『研究紀要』15：113-135, 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 塚本師也 1988 『鹿島協遺跡・追の窪遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 93 集
- 塚本師也 1989 「北関東における阿玉台式土器の様相—那珂川・鬼怒川流域を中心として—」『第 3 回縄文セミナー縄文中期の諸問題』：189-216
- 塚本師也 1995a 「栃木県における中期初頭の土器様相」『第 8 回縄文セミナー中期初頭の諸様相 記録集』：329-352
- 塚本師也 1995b 「栃木県内の五領ヶ台式土器」『栃木県考古学会誌』17：31-56
- 塚本師也 1997 『浄法寺遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 196 集
- 塚本師也 2004a 「栃木県南部域の土器と焼町土器 分布圏外出土の焼町土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』120：109-146
- 塚本師也 2004b 「栃木県における火炎土器研究の到達点と課題」『火炎土器の研究』：141-159, 同成社
- 塚本師也 2007a 「第 4 章縄文時代 第 2 節土器研究 1. 草創期」『研究紀要』15：88-96, 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 塚本師也 2007b 「第 4 章縄文時代 第 2 節土器研究 3. 前期」『研究紀要』15：105-112, 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 塚本師也 2010 「鬼怒川・小貝川流域の加曾利 E I 式期の土器—旧関城町西原遺跡第 61 号住居出土土器の位置づけ—」『茨城県考古学協会誌』22：39-68
- 塚本師也 2011 「湯西川仲内遺跡出土土器の検討—特に火炎土器について—」『研究紀要』19：19-48, 公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
- 塚本師也 2013 「第 10 回 阿玉台式土器の細分 (4)」『アルカ通信』122：1, 考古学研究所 株式会社アルカ
- 塚本師也 2014a 「近接する遺跡間における同年代の縄文土器の比較—栃木県益子町御霊前遺跡と茂木町松の木遺跡の中期縄文土器を対象として—」『研究紀要』22：55-68, 公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
- 塚本師也 2014b 「第 14 回 隣接する土器群との関係 (2)—大木式土器—」『アルカ通信』130：1
- 塚本師也 2015 「近接する遺跡間における同年代の縄文土器の比較 (2)—八溝山地西麓と東麓の中期縄文土器を対象として—」『研究紀要』23：1-20, 公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
- 塚本師也 2016a 「ムラの形成と安定した定住生活」『とちぎを掘る 栃木の考古学の到達点』：72-81, 随想舎
- 塚本師也 2016b 「那珂川流域の加曾利 E I 式初源期の地域差」『研究紀要』24：9-3, 公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
- 塚本師也 2017 「栃木県域における柄鏡形（敷石）住居の受容とその背景」『國史學』223：149-170, 國史学会
- 塚本師也 2018a 「関東地方北部からみた会津・越後の大木式系土器」『馬高式土器の成立・展開・終焉—予稿集—』：237-254
- 塚本師也 2018b 「関東地方北東部の火炎系土器」『馬高式土器の成立・展開・終焉—予稿集—』：255-264
- 出居博／太田嘉彦／山口明良 2000 『四ツ道北遺跡 I・下林遺跡 I』佐野市埋蔵文化財調査報告書第 19 集
- 勅使河原彰 1992 「縄文時代の社会構成 (上) (下) ハヶ岳西南麓の縄文時代中期遺跡群の分析から」『考古学雑誌』78-(1)(2)：1-44, 1-27
- 戸田哲也 2006 「曾利Ⅲ式土器の伝播と変容」『ムラと地域の考古学』：83-96, 同成社
- 栃木県史編さん委員会 1981 『栃木県史』通史編 1 原始 古代—
- 鳥羽政之 1991 「縄文時代前期中葉土器群の編年と地域性」『埼玉考古』28：25-48
- 鳥羽政之 1996 「関山式から黒浜式へ—古東京湾岸を中心に—」『埼玉地域文化の研究』：113-121
- 永岡弘章 2000 「栃木県鹿沼市明神前遺跡」『考古学ジャーナル』457：27-31
- 永岡弘章 2002 『明神前遺跡』鹿沼市埋蔵文化財報告書第 14 冊
- 永岡弘章・福山俊彰 2006 『明神前遺跡』鹿沼市埋蔵文化財報告書第 19 冊
- 仲田茂司 1992 「考察 土器」『西方前遺跡Ⅳ 本文編』三春町文化財調査報告書第 16 集：83-140
- 中野幸大 2008 「大木 7a～8b 式土器」『総覧縄文土器』：352-359
- 中野幸大 2018 「福島県の火炎系土器」『馬高式土器の成立・展開・終焉—予稿集—』：225-236
- 中村信博 2011a 「大田原市（旧湯津上村）品川台遺跡出土の出流原 b 式と相伴土器—出流原 b 式の新資料の提示と子母口式・常世 I 式との関係—」『唐沢考古』30：5-18
- 中村信博 2011b 「大田原市（旧湯津上村）品川台遺跡出土の撚糸文土器群」『那須文化研究』25：1-16
- 中村紀男・阿部芳郎 1992 『栃木県市貝町掘込遺跡発掘調査研究報告書—八溝山地西麓部における縄文早期集落の調査と研究—』堀込遺跡調査団
- 中村紀男・中村信博 2002 『天矢場』茂木町埋蔵文化財調査報告書第 2 集
- 中村紀男・橋本澄朗 1972 『天矢場遺跡』栃木県埋蔵文化財報告書第 4 集

- 長山明弘 2014 『加曾利 E(新) 式土器研究の歩みと針路 土器論を基礎とした先史文化の研究に向けて』, 那珂川書房
- 西野雅人 2008 「縄文中期拠点集落の消滅と小規模集落」『千葉縄文研究』2: 1-26
- 西村広経 2018 「十腰内 2 式土器の再検討」『東京大学考古学研究室研究紀要』31: 17-46
- 西村正衛 1972 「阿玉台式土器編年の研究の概要」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』18: 73-104
- 西村正衛 1984 『石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心として—』, 早稲田大学出版部
- 芳賀英一 1984 『冑宮西遺跡』福島県会津高田町文化財調査報告書第 5 集
- 橋本淳 2005 「北関東における沈線紋土器の様相」『第 18 回縄文セミナーの会 早期中葉の再検討—記録集—』: 185-231
- 橋本勉 2004 「加曾利 E Ⅲ式土器の拡散とフィードバック (前)」『研究紀要』19: 87-108, 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 初山孝行／青柳平人／谷中隆／江原英／猪瀬美奈子／井上武 1997 『寺野東遺跡Ⅴ縄紋時代 環状盛土遺構・水場の遺構編 -1』栃木県埋蔵文化財調査報告第 200 集
- 塙静夫 1958 「北関東晩期縄文土器文化の様相」『下野史の新研究』: 23-38
- 塙静夫 1960 『北関東に於ける縄文土器の編年学的研究』
- 塙静夫 1961 「北関東縄文式後・晩期土器の編年」『下野史学』12: 17-20
- 塙静夫 1973 「付録 一考古学に関する学会発表と雑感 2. 北関東縄文後・晩期土器の東北的影響について」『下野の歴史と文化』: 110-112
- 塙静夫・田代寛 1966 『雲入遺跡 矢板市下伊佐野雲入遺跡調査報告書』作新学院考古学資料室調査報告第 3 集
- 塙静夫・大和久震平 1972 『栃木県の考古学』, 吉川弘文館
- 原田昌幸 2008 「撚糸文系土器」『総覧縄文土器』: 112-121
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2003 「付章 野沢遺跡の古環境と縄文時代草創期住居跡の分析調査」『野沢遺跡・野沢石塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第 271 集: 401-436
- 福島雅儀 1987 「阿武隈川上流域における縄文時代中期後半の土器」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ: 75-88
- 福島雅儀 1989 「柴原 A 遺跡 (第 1 次) 調査の成果と課題」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告』2 福島県文化財調査報告書第 217 集: 213-239
- 福島雅儀 1996 「第 5 章 越田和遺跡の調査成果 第 3 節縄文時代中・後期の土器」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告』8 福島県文化財調査報告書第 322 集: 133-161
- 福島雅儀 2012 「阿武隈川上流域における縄文中期から後期への集落変化 福島県三春町柴原 A 遺跡と越田和遺跡の発掘調査から」『国立歴史民俗博物館研究報告』172: 357-414
- 細田勝 1989 「黒浜式土器成立の背景について—特に東北地方土器群との対比を通して—」『古代』87: 1-48
- 細田勝 2003 「南関東加曾利 E 式について」『第 16 回縄文セミナー 中期後半の再検討』: 239-276
- 細田勝 2008 「加曾利 E 式土器」『総覧縄文土器』: 410-417
- 堀越正行 2000 「191 株木東遺跡」『千葉県の歴史 資料編考古 1 (旧石器・縄文時代)』: 696-697, 千葉県
- 松田光太郎 2008 「浮島式・興津式土器」『総覧縄文土器』: 290-297
- 松本茂 1982 「第 1 篇七郎内 C 遺跡 第 5 章考察 第 1 節縄文時代の遺物と遺構」『国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告』X 福島県文化財調査報告書第 108 集: 211-225
- 三沢正善・福田定信 1982 『乙女不動原北浦遺跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告書第 11 集
- 村木淳 2010 「新井田川下流域における縄文・弥生集落」『河川流域の縄紋景観』: 5-12, 公開シンポジウム『河川流域の縄紋景観』実行委員会
- 森貢喜 1974 「縄文時代における敷石遺構について」『福島考古』15: 14-23
- 森幸彦 2008 「大木 9・10 式土器」『総覧縄文土器』: 360-367
- 安田喜憲 1982 「気候変動」『縄文文化の研究』1 縄文人とその環境: 163-200
- 山内清男 1932 「縄紋土器の終末」『どるめん』1(6), 1(7): 46-50, 49-53
- 山内清男 1934 「真福寺貝塚の再吟味」『どるめん』3(12): 904-911
- 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1(1): 28-32
- 山内清男 1940・1941 『日本先史土器図譜』Ⅶ・Ⅹ・Ⅺ
- 山内清男 1964 「縄文式土器・総論」『日本原始美術』: 148-158
- 山口明良 2001 『屋敷東Ⅱ・屋敷東遺跡』佐野市埋蔵文化財調査報告書第 21 集
- 山口明 1980 「縄文前期末葉鍋屋町系土器群の動態」『長野県考古学会誌』39: 1-25
- 山口明 1984 「中部地方における前期末葉土器群と鍋屋町式土器」『長野県考古学会誌』48: 13-31
- 山本暉久 1979 「石棒祭祀の変遷」『古代文化』31(11)(12): 1-41, 1-24
- 山本暉久 1996 「敷石住居址研究の現状と課題」『パネルディスカッション「敷石住居の謎に迫る」』資料集, 神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人かながわ考古財団
- 山本暉久 2000 「外縁部の柄鏡形 (敷石) 住居」『縄文時代』11: 1-40
- 山本暉久 2002 『敷石住居址の研究』, 六一書房
- 山本暉久 2012 『柄鏡形 (敷石) 住居と縄文社会』, 六一書房
- 吉田格 1960 『横浜市称名寺貝塚発掘調査報告書』, 武蔵野文化協会
- 領塚正浩 1992 「堀之内貝塚出土の堀之内式土器」『堀之内貝塚資料図譜』: 63-85, 市立市川考古博物館
- 領塚正浩 2008 「貝殻・沈線文系土器」『総覧縄文土器』: 94-103
- 渡辺一雄・大竹憲治 編 1983 『道平遺跡の研究—福島県道平における縄文時代後・晩期埋設土器群の調査—』, 福島県大熊町教育委員会
- 渡辺竜瑞 1953 「那須郡の先史文化」『下野史学』2: 23-36
- 渡辺竜瑞 1955 「北関東縄文式文化の編年」『鹿沼史林』2: 9-19



## **Context and trends regarding the number of pit dwellings in Jomon-era Tochigi prefecture**

### **-One aspect of the transition period from the mid- to late-Jomon era in the northern Kanto region analyzed through factors of cultural diversification-**

Kei OTA

Research into the transition period from the mid- to late-Jomon era has thus far evaluated whether there was a dramatic change such as a “collapse or stagnation ” due to primary factors in the natural environment, such as a cooling climate. However, these evaluations interpreted the results of the analyses of materials in specific regions, and many regions have not yet been targeted by this evaluation following the collection of more comprehensive archaeological materials. Up to now, discussions have focused on comparing the process of social change in the transition period from the mid- to late-Jomon era, in the Koshin region, southwest Kanto, and northeast Kanto. Regions that could not be actively evaluated in prior discussions concerning the transition period, such as areas between northern Kanto and southern Tohoku region, can now be studied. The present paper analyzes trends in the number of pit dwellings in Tochigi prefecture in northern Kanto and arranges basic data concerning the forms of dwellings. We consider the relationship between these results and other cultural factors, and by presenting one aspect of the social change process in the transition period in Tochigi prefecture, we highlight questions for future research into the transition period. The present paper reveals aspects of the transition phase that can be evaluated at the present time in regions spanning from the Nasu region of Tochigi prefecture to the Naka-doori region Fukushima prefecture, including a strong commonality in factors for cultural diversification in the mid to late periods, and clarifies that there were both strong connections and localism through the mid to late periods, from north-eastern parts of northern Kanto to southern Tohoku region. This aspect brings into sharp focus that rather than a simple “collapse/stagnation,” the process of social change in the transition period in Kanto and Tohoku involved changes to factors of cultural diversification, due to changes in the wider area of society and the natural environment. We can clearly see that although social changes were occurring across a wide area in eastern Japan during the same transition period, various different changes occurred at the same time in different regions; the society of the late period onward took form as a result of the bidirectional influence of these changes.